Prince of genius rise worst kingdom ~YES,treason it will do~

鳥羽 徹 Toru Toba
Illustration ファルまろ Falmaro

売国しようぜ

天才王子の赤字国家再生術

GA文庫

第一章　その名はウェイン・サレマ・アルバレスト

ナトラ王国、王宮。

その石造りの回廊（かいろう）を、二人の男が歩いている。

男たちは身なりのよい出（い）で立ちだ。歩く仕草（しぐさ）からも品位を感じられる。

それもそのはず、二人はこのナトラ王国において、長らく国王に仕えてきた家臣であった。

片や文官、片や武官。その能力を奮（ふる）う場所こそ違えど、同時期に家臣として登用された二人は馬が合い、時折こうして王宮で顔を合わせて話に花

を咲かせる間柄だった。

しかし今、久しく会っていなかった親友と歩いているにも拘わらず、二人の表情は沈痛だ。

その理由が共通していることを、二人は知っていた。

「陛下の病状……やはり芳しくないようだ」

文官の男が、重い声音で呟いた。

武官の男は固く瞼を閉じ、息を吐く。

「ここ数年、大陸全土で気候が荒れたからな。生来お体が弱い陛下には負担が大きかったか……」

「天の機嫌とは厄介なものだ。我が国以外でも、要人が倒れ混乱が起きているところは少なくない」

「帝国の皇帝(こうてい)までも倒れたという話だからな。おかげで向こうの宮廷は、権謀術数(けんぼうじゅっすう)渦巻く悪鬼(あっき)の巣窟(そうくつ)となっていると聞く」

文官の男が鼻を鳴らした。

「皇帝はそのカリスマ性で帝国を牽引(けんいん)していたようだが、強い光ほど消えた時の闇(やみ)は深まる。まして後継者も指名していなかったとなればな」

「我が国と似たような状況か。だが帝国と違い、我らに希望があるとすれば――」

その時、回廊の向こう側に人が現れた。

二人はそれが誰(だれ)かを認めるや否(いな)や、すぐさま道を譲り敬礼の姿勢を取る。彼らがこの宮殿におい

て道を譲り礼をする相手は、僅(わず)かしかいない。

「「おはようございます、ウェイン殿下(でんか)」」

二人が揃(そろ)って礼を送る先に立つのは、従者を連れた一人の少年。

ナトラ王国王子、ウェイン・サレマ・アルバレストである。

「ああ、おはよう」

齢(よわい)にして十六。まだ少年と言って差し支えない人物だ。

されどつい先日、彼は摂政(せっしょう)の座についた。倒れた王に代わり、政務を執(と)り行うためである。

「どうした二人とも、暗い顔だな。……父上のこ

とか？」

ウェインの問いかけに二人は恭しく答えた。

「はっ、ご明察の通りです」

「申し訳ありません。陛下のご容体が芳しくないと聞き……」

そうか、とウェインは小さく呟くと、二人の肩に手を置いた。

「案ずるな。俺がいる」

ウェインの力強い言葉に、二人の体は僅かに震えた。

「そして俺だけじゃない。ナトラ王国には、長年父上を支えてきた家臣たちもいる。この両輪が一

つの目標に向かって共に走るのであれば、どんな国難も乗り越えられるはずだ」

「殿下……」

「まさしく、仰(おっしゃ)る通りです」

頷(うなず)く二人に、ウェインは微笑を浮かべた。

「父上に回復に専念して頂くためにも、我らに嘆いている暇はない。ますますの奮起(ふんき)を期待しているぞ、二人とも」

「「はっ！」」

ではな、とウェインは従者を連れて回廊を進んで行った。

その背中が消えるまで見送った後、二人は深く

感嘆の息を吐く。

「……やはり、あのお方こそ我らの希望だな」

「ああ。幼き頃（ころ）より才気の片鱗（へんりん）を覗（のぞ）かせていたが、帝国への留学から戻って以来、見事に開花された。宮廷の混乱も収まり、今や家臣たちは殿下の元で団結している」

「ふっ、帝国が耳にすればさぞ羨（うらや）むことだろう」

「ならば奴（やつ）らを一層歯ぎしりさせるためにも、共に殿下をお支えせねばならんな」

「ああ、もちろんだ」

二人は頷きあった。

先ほどまでの暗い表情は、もはやどこにも存在

しない。

二人の胸の中には、王国の輝ける未来の姿がしっかりと浮かんでいた。

◆◇◆

ナトラ王国の王宮の中心には、政務をこなすための執務室がある。

その重厚な扉が開き、現れるのはウェインとその従者だ。本来ならば国王が使用する部屋だが、今は摂政である彼が使っている。

「ニニム、今日の予定をもう一度」

書類が積まれた机の椅子（いす）に腰かけながら、ウェインは従者に問いかける。

ニニムと呼ばれたその従者は、見目麗（みめうるわ）しい少女だ。年齢はウェインと同程度か。透き通るような白い髪と燃えるような赤い瞳（ひとみ）が特徴的だ。

「午前は報告書の確認と意見見書の裁定を。昼食会を挟みまして、午後は会談が三件と、陛下へお見舞いの予定が入っております」

「なら、午前中はこの部屋を訪れる者はいないな？」

「はい」

そうか、とウェインは小さく呟き、そして、

「国売ってトンズラしてええええええ！」

思いっきり叫んだ。

「なーにが両輪が一つの目的に向かって共に走れば、だ！　嘘ですうー！　この国の詰みっぷりはそんなんで解決できませんー！　無ー理ー！　絶対無ー理ーでーすうー！」

「またそんなこと言って」

突然態度を豹変させた主君に対して、しかしニムは動揺することなく、いくぶん砕けた口調で告げた。

「冗談でも口にすることじゃないわよ、ウェイン」

「冗談って何だよニニム！　俺は真剣に言ってる

つつーの！」

「なお悪いわよ」

はぁ、とため息を吐くニニム。

ナトラ王国の次代の名君として敬われる少年――

ウェイン・サレマ・アルバレスト。

しかしその実体は、義務、責任、努力といった言葉が大嫌いなダメ人間であった。

「人目が無くなるとすぐだらしなくなるんだから……もう少しシャキッとしなさい」

ウェインの本性を知る数少ない人間の一人が、

このニニム・ラーレイだ。

立場的にはウェインの筆頭補佐官（ひっとうほさかん）であり、幼い頃から

彼に仕える側近中の側近である。国政を預かる摂政に就いた若い王太子の補佐が、同じくらい若い少女であることは、常識的に考えれば何の冗談かと思われるところだが、しかしそれを口にする者はこの宮廷にはいない。

理由としては、彼女を重用する王太子の勘気（かんき）に触れるのを恐れているのが半分。もう半分が、二ムがこれまで補佐として確かな実績と能力を発揮しているためである。

二人きりで幼馴染（おさなじみ）とはいえ、仮にも王太子である彼にこんな口を利けるのも、長い時をかけて培（つちか）った信頼と実績があってこそだ。――もっとも、その二つがあるために、最近は苦言ばかり口にして

しまうのだが。

とはいえ、ウェインの口から益体（やくたい）のない愚痴（ぐち）が飛び出すのは、何も彼の気質だけが理由ではない。

「ほーん？　なになに何スかその優等生気取りな態度はぁ!?　ニニムだってこの国の全方位ド貧国つぷりは解ってるはずだろぉ!?」

「ド貧国は言いすぎよ。……ちょっと人材が足りなくて、だいぶ資源が不足してて、かなりお金が無いだけじゃない」

「それを世の中じゃド貧国っていうんだよ！」

ナトラ王国はヴーノ大陸にある国家の一つである。人口は五十万人ほどで規模としては小国。大陸

最北端に位置し、春は短く冬は長い。さらに国土の大半は不毛な岩と山だ。

歴史はあるが国内資源は乏しく、ろくな産業もない。名物といえば雪景色ぐらいだが、ありがたがるのは遠方から訪れる酔狂（すいきょう）な旅人ぐらいで、王国民からすれば厳しい冬の訪れを告げる小憎たらしい天の恵みである。

歴史が長いのも、侵略の旨味（うまみ）に乏しく、他国から見向きされなかったためだ。歴代の君主が総じて賢明であったがゆえに、どうにかこれまで国家としての体裁（ていさい）は維持されてきたが、控えめに言って何かの拍子に吹き飛びかねない弱小国家である。

「内政に手を入れようにも金がない。金を集めようにも産業がない。他所から奪おうにも軍事力がない。優秀でまともな人材は立身出世を目指して他の国へ行く！　しかも大陸の各地で火種が燻ってていつ嵐が起こるか解らん状況で親父が倒れて俺が国のかじ取りとかあああああもおおおおおおお！」

そういうわけで、ウェインのこの嘆きにも一理はある。十代半ばの少年が背負うには少々重すぎる責務であることは間違いない。だからといって、誰かが代われるものではないのだが。

「あーあ、何で俺はこんな国の王子に生まれたんだ。もっと資源と人材と資金で溢れる国に……あ、だ

めだ、絶対侵攻される。資源はちょっと削る感じで……人材も強すぎるとクーデター起きそうだし弱めに……」

「はいはい、無駄なこと言ってないで。ほら、仕事を始めるわよ」

ぶつぶつと益体（やくたい）のない妄想を口にするウェインの鼻面（はなづら）に、ニニムは書類を押し付ける。

んあー、と亡者（もうじゃ）のような声を発しながらウェインは書類を受け取り、眺めると、ニニムに突き返した。

「問題なし。次」

「……ちゃんと読んだ？」

「読んだ読んだ。超読んだ。ニニムの体重が増えたって書いて痛(いて)えっ！　おま、王子の足を踏むとか不敬だろ！」

「敬意を払ってほしいならもう少し真面目(まじめ)にやりなさい。それと私の体重は増えてないわ」

「はぁーん？　おいおいおい、ダメだぜニニム全然ダメだ、お前の足音の変化に気づかない俺だと思ったか？　その起伏の少ないボディは間違いなく先週より六百グラム以上の重量を蓄えておい馬鹿(ばか)やめろ俺の腕はそんな方向に曲がらなぐおおおおおお!?」

「このまま関節の限界に挑戦するのと仕事に取り

掛かるの、どっちがいいかしら？」
「お、お仕事頑張らせて頂きます……！」
「よろしい。それと私の体重は増えてない。いいわね？」
「ふぇーい」
ウェインの尻を蹴り飛ばして仕事をさせられるのは、王国広しといえ二ムだけである。
「はーやだやだ。俺は何にも煩わされずに、金貨に囲まれながら二ムをからかって悠々自適に暮らしたいだけなのに、どうしてそれが叶わないんだか」
と、ウェインが机に突っ伏したまま世迷いごとを口に

したその時、執務室の扉がノックされた。

ウェインは即座に起き上がり、同時に扉がガチャリと開いた。現れたのは一人の少女だった。

「お兄様、いらっしゃる？」

年齢はウェインたちより少し下か。涼やかなドレスを纏い、長い黒髪をなびかせて、軽やかな足取りで部屋に入る彼女は、まさしく可憐というに相応しい。

それでいて顔立ちにウェインと似た雰囲気を感じさせる。それもそのはず、彼女の名はフラーニャ・エルク・アルバレスト。ウェイン・サレマ・アルバレストの妹であり――すなわちナトラ王国王

女である。

「――フラーニャか。どうかしたか？」

さも勤勉に仕事をこなしていたかのように、ウェインは背筋を伸ばしたまま書類から顔を上げた。

「ええと、大したことではないの。ただ、最近お兄様が忙しくて、あまりお話しできていないと思って」

フラーニャは少し申し訳なさそうに、それでいてどこか期待を込めた眼差(まなざ)しを向けながら言った。

「……ご迷惑だったかしら？」

「まさか」

ウェインは微笑(ほほえ)んだ。

「妹の来訪を迷惑と考える兄がいたら、それは生まれる順番を間違えているな。おいで」

フラーニャの顔がパッと華やいだ。そしてウェインの傍（そば）まで駆け寄ると、彼の膝（ひざ）にぴょんと跳び乗った。

「っとと……フラーニャ、おいでとは言ったけど、これはちょっとはしたないぞ」

「そんなことないわ。昔からここが私の特等席だもの」

そう言ってフラーニャは頬（ほお）をウェインの胸にこすりつける。小動物が甘えるかのような動作だ。

思わずウェインの頬が緩（ゆる）むが、フラーニャの視

線が向かうとすぐさまキリっと締め直す。傍にいたニニムが紙にさらさらと文字を書き、ウェインにだけ見れるように示した。

『シスコン』

『ほっとけ』

ウェインも文字で返事をしていると、フラーニャがきょとんとして首を傾(かし)げる。

「お兄様、どうかしたの？」

「いや何でもないよ。ただそう、どこかの誰かと比べてフラーニャはまだまだ軽いと思ってな」

「お兄様ってば。人の体重を比べるだなんて失礼よ」

「はは、悪い悪い」

言いながらウェインはニニムを見た。

『後でシメるわ』

見なかったことにした。

「でも良かった」

フラーニャは安堵（あんど）の吐息を漏（も）らす。

「お仕事を真面目にしてるお兄様のお邪魔をして、怒られないか不安だったの」

「……」

「お兄様？」

「いや、まあ、うん、真面目にやってるぞ。なあニニム？」

「もちろんです。――今も用意していた仕事では物

足りぬと、こうして追加を求められるほどですから」

そう言ってニニムはどこからともなく取り出した山のような書類を机に置いた。

「摂政として十全（じゅうぜん）たろうとする殿下の姿勢、このニニム、心より感服しております」

「まあ。さすがお兄様だわ」

「……だろう!?　王子として当然のことだからな！」

こんちくしょう、という視線をニニムに向けながらウェインは強気に笑った。もちろんニニムは素知らぬ顔だ。

「けれどこれじゃあ、当分はお兄様にお休みなん

て無さそうね」

「そうだな。家臣の協力で宮廷は大かた掌握できたが、まだ国内の混乱は収まってない。これをどうにかするまでは忙しい日々が続くと思う。……すまないな、本当なら遊んでやりたいところだが」

「お兄様が謝る理由なんて一つもないわ」

ふるふると頭を振り、それから不安そうにフラニャは呟いた。

「ただ、無理だけはしないでほしいの。もしもお兄様がお父様みたいに倒れたら……私にできることなんて何もないし……」

「心配するな、こう見えて俺はしぶといんだ。そ

れにフラーニャが何もできないっていうのも間違いだ」

「……私に何かできるの？」

「難しいことじゃない。笑顔でいてくれていればいいんだ」

ぷに、とウェインはフラーニャの頬を指でつついた。

「フラーニャが明るく笑ってくれるだけで、俺も父上も元気になる。これはフラーニャにしかできないことだ」

「……ほんとに？」

「もちろん。俺が嘘を吐いたことなんて……それ

なりに……いや結構……うん、ともかく、これについては本当だ」

「じゃあ……こう？」

フラーニャはにこっと笑顔を浮かべた。ウェインは満足げに頷いた。

「だいぶ元気になった。ただそうだな、この上でさらに抱き付いてくれればもっと元気になると思う」

「ふふ、お兄様ってば。えいっ」

フラーニャはくすくす笑いながらウェインの体に抱き付いた。

「これでどうかしら？」

「ああ、これなら午後の仕事も乗り切れるな。特

に今日は大一番があるから助かった」

「それなら良かったわ。……でも、大一番って？」

抱き付きながら首を傾げるフラーニャに、ウェインは言った。

「帝国大使との会談だ」

◆◇◆

アースワルド帝国とは、ヴーノ大陸東部における一大国家である。

恵まれた気候と肥沃（ひよく）な土地。鉱物資源も豊富であり、大陸でも一、二を争う巨大な湖を抱えて水

産も盛んだ。およそ国が豊かになる全(すべ)てを備えた国であり、それゆえ、建国以来何度も他国から侵略を受けてきた国でもある。

それらを跳ねのけるために自然と帝国は軍事に傾倒(けいとう)し、気づけば大陸随一の軍事国家となった。そして今代の皇帝になると、その軍事力を背景に隣国を次々と占領していった。

帝国の勢いはまさに破竹(はちく)であり、歴史上一度として成立していない大陸統一を成し遂げるのではとすら思われたほどだ。

皇帝が倒れた、その日までは。

――以上が、ウェイン・サレマ・アルバレスト

王太子の情報になります」

「御苦労様」

補佐官の締めくくりに、あてがわれた館の一室にて、フィシュ・ブランデルは小さく息を吐いた。

年齢は二十代半ばだろうか。流れるような金髪が特徴の、美しい女性だ。

しかしフィシュは美しいだけの人物ではない。彼女こそ帝国より派遣されたナトラ王国駐在大使である。

「噂通りの仁徳に溢れた次代の賢君、ってところね」

「ええ、内外ともにナトラ王国の次期国王として認められています。摂政への就任にも反発はほと

んどなかったようです」

「帝国(うちは上を下への大騒ぎだっていうのに、羨(うらや)ましいことだわ。でもそれだけに、これまで繋(つな)がりを持てなかったのが悔やまれるわね」

「それは仕方ありませんよ。大使の赴任(ふにん)と王太子の帝国留学時期が重なっていたわけですし」

フィシュがナトラ王国に赴任したのはここ数年のことだ。根強い交渉で国王とはそれなりに話し合える関係を構築できたが、状況は一変してしまった。

「今日の会談で王太子はどう出てくるでしょう？」

「世間話で終わり……とはならないでしょうね。

駐留してる帝国軍について言及するのは間違いないわ」

現在、ナトラ王国には帝国軍が五千人ほど駐留している。これは国王との交渉によって正式に許可されていることだが、他国の軍を置くことにはナトラ王国内で不安と反発があることをフィシュたちは知っていた。

「軍の撤退を要求されるでしょうか」

「どうかしらね。ただ、この会談で情報以外の彼の人となりが……そして本物の王器（おうき）の持ち主かが、少なからず見えてくるはずよ。まあ、フラム人を抱えてる時点で、変わり者ではあるんでしょうけど」

「ニニム・ラーレイですか」

「ええ。この国にフラム人が多く住んでいるのは知っていたけど、まさか帝国以外にも家臣として登用している国があるとは驚いたわ」

「まったくです。しかも彼らを受け入れた歴史は帝国より遥かに古いそうですよ。西側の国からすれば、奴隷階級である彼らを人として扱ってるこの国は奇異に見えるでしょうね」

「我が帝国が大陸を統一した暁には、そんなくだらない価値観は消え失せるわ。……そろそろ会談の時間ね」

フィシュは立ち上がる。ウェインとは簡単な

挨拶（あいさつ）こそ交わしてはいるが、こうして正式に話し合いの場を設けるのは初めてだ。

「本国からの情報が正しいなら、帝国の停滞も近々終わるわ。そのためにも、駐留の件は是が非でも維持するわよ」

固い決意とともに、フィシュは会談の場へ向かった。

◆◇◆

「フィシュ・ブランデルは元々バンヘリオに派遣されていた大使です」

宮廷の廊下を歩きながら、ニニムは前を行くウインに向かって会談相手の情報を告げる。

「バンヘリオとなれば西の大国。それがなぜこの国に？」

人目もある廊下のため、二人の言葉遣いは主従のそれ。しかしその程度の切り替えはお互い既に慣れたものだ。

「本国の政争に巻き込まれたようです。そして殿下の帝国留学と入れ替わるようにナトラに。出世街道から外れたものの、かなりのエリートのようですね」

「だとすれば、ナトラの田舎（いなか）暮らしは退屈だろう」

「それが本人は案外満喫しているようですよ。中央の政治に関わるのはもうまっぴらだと常々語っているとか」

ウェインは苦笑した。

「なるほどな。事情がなんにせよ、他国の民から我が国が好かれるのは喜ばしいことだ。……しかしそれほど優秀な人間だとすると、会談は一筋縄ではいかないな」

「目下の問題としてはやはり駐留帝国軍ですが……難しいところですね」

それなんだよなー、とウェインは内心でため息を吐く。

そもそもの話として、なぜナトラ王国に帝国軍が駐留しているのか？

名目上は軍事訓練のために土地を貸りている、というものだが、もちろんこれは本当の目的ではない。

ではなぜかといえば、いくつか要因があるものの、突き詰めるとナトラ王国の微妙な立地に辿り着く。

一つ、大ざっぱに楕円を想像してもらいたい。それがヴーノ大陸だ。

そして巨人の背骨と呼ばれる長い山脈が、大陸を真っ二つにするように北から南にまで伸びている。この山脈という障壁によって東西は分断

され、東と西で国体、人種、思想、文化が大きく異なっているのが現状だ。

もちろん、行き来ができないわけではない。遥か昔ならばともかく、今は整備された道も多くある。あるが――それらはあくまで個人や行商が利用する道の話だ。

そういった道を静脈と表現するのなら、千や万の兵隊が往来できる道は動脈だ。その数は静脈よりも少なく、当然、交易の面でも軍事の面でも動脈を抑えることは大きな価値を持つ。特に大陸の覇権を狙(ねら)う国にとっては必須とも言っていい。

そして何を隠そうナトラ王国は、大陸最北にあ

る動脈の上に造られた国なのである。

大陸統一を狙う帝国にとって、放っておける場所ではなかった。

（どうしたもんかな）

帝国軍が駐留するにあたって、少なくない代金がナトラに支払われている。彼らは決して一方的に居座っているわけではない。しかしそれでもやはり他国の軍がすぐ間近にいることは、喉元（のどもと）に刃（やいば）を突きつけられているようなものだ。民は不安になるし、王国軍も良く思っていない。

いや、もっと直接的に言えば、軍部はウェインが摂政に就任したのを契機として、帝国軍を撤退させることを期待していた。

彼らの気持ちはわからないでもない。国防に対する懸念もあれば、メンツの問題もあるだろう。しかしウェインには易々と彼らの望み通りに動けない理由があった。

その理由とはすなわち、

（ぶっちゃけ帝国に媚びを売りたい！）

というわけである。

（あんな大国に逆らっても面倒なだけだし、駐留の代金も正直助かってる。俺としては契約続行で何の異論もないんだよなぁ……）

自身が留学していたこともあり、ウェインは帝国に造詣が深く、国力の差は身に染みている。

さりとて、このまま軍部の期待を突っぱねるのも問題だ。

（摂政の就任がスムーズだったのは、それだけ家臣が俺に期待してるからだ。就任早々帝国に尻尾（しっぽ）を振って失望されたら今後がやりにくい。特に武官連中がヘソを曲げたらクーデターを起こされる可能性もあるし）

あちらを立てればこちらが立たず。

板挟みの状況にウェインが呻（うめ）いていると、ふと傍（かたわ）らを歩いていたはずのニニムの姿が消えていたことに気が付いた。

「ニニム？」

「――失礼しました」
呼びかけると、物陰よりニニムが姿を現す。
「今しがた帝国の密偵より報せが」
「報せ……？」
彼女は書簡を差し出した。ウェインはそれを受け取り中を見る。
「……へえ」
ウェインは片眉を上げた。
「この情報は間違いなく大使側も摑んでいるな……となると……」
そしてしばしその場で瞑目すると、不意に歩きだした。

「行くぞニニム、方針は決まった」
「はっ……しかし方針とは？」
「決まっている」
にっとウェインは笑った。
「総取りだ」

◆◇◆

「お久しぶりです、摂政殿下」
応接の間に到着したウェインとニニムを迎えたのは、先に待っていたフィシュ・ブランデルとその補佐官だった。

「既に一度ご挨拶はさせて頂きましたが、改めまして、アースワルド帝国大使、フィシュ・ブランデルです」

「ナトラ王国王子、ウェイン・サレマ・アルバレストだ」

互いに名乗りあい、席に着く。口火を切ったのはフィシュの方だ。

「本日はお時間を頂き、ありがとうございます。殿下におかれましては、摂政へのご就任の儀、誠におめでとうございます。恐れながら、国王陛下のご容体（ようだい）が優れないことで、王国に悲嘆が広がっているのを痛感していました。それゆえ此度（こたび）のこ

とは、まさしく暗雲に一条の光が差し込まれたことと思っています」

「ありがとう、ブランデル大使。この肩に多くの期待がかかっていることは私も感じている。それを裏切らないよう努めるつもりだ。我がナトラとアースワルドの友好のためにも、互いに協力できることを願っている」

「もちろんです、摂政殿下」

会談は和(なご)やかに始まった。

ウェインとフィシュは取り留めのない会話を交わす。そうしながら片や国家元首代行として、片や大国より派遣された大使として、向かい合う相

手の器（うつわ）を測り、人となりを確かめ合うのだ。それは一種の共同作業といえる。

しかし同時に、常にピリッとした緊張感が部屋にあるのを、この場にいる全員が感じている。

彼らは解っているのだ。この共同作業の間にどれだけ相手に差をつけるかが、この後に待ち受ける本題に大きく関わってくることを。

（……なるほど、この懐（ふところ）の深さは本物ね）

ウェインと言葉を交わしながら、フィシュは早々に彼が油断ならない相手であると感じ取っていた。

（若く、経験の乏しい人間はとにかく早急な結果を求めたがる……けれど彼にはその焦（あせ）りがまるで

ない。王太子という立場を鼻にかけず、こうして同じ高さの席に座るのも余裕の表れね。摂政の座について間もないのに、貫禄（かんろく）すら感じられるわ）

こちらの探りを軽くいなし、かといって逆手（さかて）に取って詰め寄るということはせず、悠然と構える。底が見えない相手だ。少なくとも自分が彼と同じ年齢の頃、これほどの深さは持っていなかった。

（本気でかからないと持っていかれるわね……）

警戒心を強め、フィシュは気を引き締めた。

と、フィシュが考える一方で、ウェインもまた強い確信に至っていた。

（この人おっぱいでかいな……）

最低である。

（前に挨拶した時は忙しかったから気づかなかったけど、かなりの大物だ……ただの脂肪（しぼう）の塊なのに貫禄すら感じる。これも富める帝国の人間だからこそか。それに比べて……）

ウェインはちらりと席の後ろに控える二二ムを見た。具体的には、その慎（つつ）ましやかな胸部を。

（……戦力差は歴然だな）

ぷす、と二二ムの持っていた羽ペンが後頭部に突き刺さった。

「っ……！」

「殿下？」

「いや、少し頭痛がな。多忙を理由に睡眠時間を削るのはやはりよくないようだ」

慌てて取り繕っていると、ニニムが背後から書類を差し出した。隅っこに『真面目にやりなさい』と書いてあった。

なぜ考えていることがバレたのだろうか。女の勘の恐ろしさを感じていると、フィシュが微笑（ほほえ）みながら言った。

「――それにしても、肩の荷が下りた気分です。実を言えばこの会談が始まるまで、殿下と良い関係を築けるか不安でしたが、こうして言葉を交わすことで杞憂（きゆう）であると確

信いたしました」

「大使にそう言ってもらえると私としてもありがたい。帝国との友誼（ゆうぎ）が強固であると確信できれば、私の悩みも少しは晴れるというものだ」

「それはそれは。やはり国政を担うというのは、悩みが尽きないものですか？」

「さながら海を飲み干そうとしているかのような気分だよ。民の暮らし、他国や諸侯との関係、軍の練度、財源、産業……考えることは山積みだ」

「……その中に」

フィシュの眼が鋭く光る。

「駐留帝国軍については、含まれておりますでし

ようか」

空気が張りつめた。

前哨戦（ぜんしょうせん）は終わり、本番が始まる。

（さあどう返してくる？）

フィシュが油断なく見つめる中で、ウェインは口を開いた。

「私としては、帝国との関係の維持を第一に考えている」

「それでは」

「しかし」

言葉を被（かぶ）せ、ウェインは続ける。

「我が軍の人間が、他国の軍隊を置いている現状に強い懸念を抱いているのも事実だ」

ウェインの言葉に、フィシュは動揺しなかった。ここまでは想定している範囲内だ。帝国の顔を立て、軍部にも良い顔をしたい。そのためにこちらから何か――恐らくは資金か物資か――譲歩を引き出す。そんなところだろうと予見し、準備もしてある。

だからこそフィシュは、次のウェインの言葉に僅かな戸惑いを得た。

「ゆえに、私はその懸念を取り除くべきだと思っている」

「はっ……取り除く、ですか？」

「そうとも。先ほども言った通り、私は帝国との関係の維持を重視している。ならばこそ、帝国軍と我がナトラ王国軍の溝を埋めるべきだ。そうだろう？」

「……仰る通りです」

まずい、とフィシュは思った。明らかに意図をもって誘導しにきているが、その意図に思考が追いつかず向こうにペースを握られた。しかし今は取り戻せるタイミングではない。

「そのために私は、これを機に王国軍を再編しようと計画しているところだ」

「軍の再編を……？」

「恥を晒(さら)すようだが、我が軍は決して精強ではない。なにせ実戦経験がほとんどないからな。そしてその未熟と無知こそが、帝国軍との軋轢(あつれき)を生み、相互理解を阻(はば)んでいる」

「再編することで、それを失(な)くそうと？」

「その通りだ。しかし重ねて恥を晒すが、ただ王国軍の中でやり直すのでは進歩も変化も生まれない。それに加えて実行する資金も乏しい」

ウェインはにっと笑った。

「そこでだ、ブランデル大使。――我が王国軍に、帝国軍のノウハウと資金を提供してもらえないだ

ろうか？」

このウェインの言葉には、フィシュのみならず補佐官やニニムまでもが目を見張った。

（何を馬鹿な！　こんな要求通るわけがない！）

補佐官が内心で声を張り上げる一方、ニニムも眉根（まゆね）にしわを寄せる。

（王国（うちこく）の軍を帝国（そっちこく）のノウハウで鍛えてよ。そのための金も帝国（そっちこく）持ちね、なんて……吹っ掛けるにしても限度があるわ。それともここから徐々に要求を下げていくつもり？）

二人は思わず懐疑的な視線をウェインに向ける。

しかしウェインはどこ吹く風だ。それは自分の提案が決して無茶なものではないと確信している風情（ふぜい）であり――事実、対面しているフィシュの反応は二人と違った。

「……果たして、それで本当に軋轢は解消されるでしょうか？」

「帝国にそれだけ誠意を見せられれば、いかに武門の人間とて心に響くものがあるだろう。それに私も解消のために尽力するつもりだ」

「……」

フィシュが深く沈黙する。その脳裏（のうり）で猛然と思慮が巡らされているのは言うまでもなく、三人の

視線が集まる中で、やがて彼女は口を開いた。

「解りました。細かい条件はこれから詰めるとして……殿下の提案、受け入れましょう」

「ありがとう大使。貴女(あなた)なら理解してくれると思っていたよ」

ニニムと補佐官が驚く中で、二人は固く握手を交わした。

◆◇◆

「つーかーれーたー！」

日も暮れ、月が浮かぶ夜。

摂政としての業務を終えたウェインは、寝室に到着するや否やベッドに倒れ込んだ。

「あーやだ、もーやだ。なんで摂政ってのはこんな忙しいんだ。こうなったら明日は休日にしよう。ついでに明後日と明々後日も」

「ダメに決まってるでしょ」

ベッドの上をごろごろと転げ回るウェインを見ながら二ニムはため息。

「それよりウェイン、聞きたいことが」

「残念ながら本日の業務は終了しました。もう俺は寝るので二ニムも部屋に戻ってお休みしてください」

「少しだけでいいから」
「……どうしても？」
「どうしても」
ふむ、とウェインは呟いた。
「じゃあ寝るまでの間、語尾ににゃんをつけてくれるなら話す」
「……」
「へいへいへーい！　どうしたのかな二二ムにゃーん!?　お前の好奇心はこの程度の恥すら乗り越えられないもんなのかにゃーん!?」
「……解ったにゃん」
「んんんんー!?　聞こえないにゃーん！　もっと

大きな声で言ってくれなきゃ困るにゃおおおお俺の腕があらぬ方角に！」

「あまり調子に乗るなにゃん」

「す、すいませんでしたにゃん……」

そして場を仕切り直したところでウェインは言った。

「でだ、なんであのおっぱいがこっちの提案を呑んだか、だろ？」

「おっぱいって……まあその通りよ」

「にゃん」

「……その通りにゃん」

二二ムからの抗議の視線を受け流しながらウェ

インは言った。

「会談の前に届いた帝国からの報せを覚えてるか？」

「え？　ええ、もちろん。――アースワルド帝国皇帝に快復の兆しあり、でしょ？」

「それが理由」

「どういうこと？　……にゃん」

ウェインは上体を起こした。

「いいか、ナトラ（うち）は東西を結ぶ出入り口の一つに位置してるが、実際のところ、この道は他と比べれば貧弱で使い勝手が悪く、優先度は低い。そこで他の道を制圧するまで、この国が他の国に奪わ

れたりしないよう派遣されたのが、帝国軍五千の兵だ。そして順番が来れば、この国は武力か外交で帝国の属国になる……はずだった」

「皇帝が倒れたことでプランが崩れたわけね」

「そうだ。宮廷は荒れ、攻め落とした国の統治に失敗し、各地で反乱の火種がくすぶり始めた。それらに対処するため、ナトラ（うち）みたいな弱小国相手でも友好関係を築いて時間を稼ぐ必要があった」

「でも、その皇帝が快復した。……解らないわね、尚更（なおさら）このタイミングでナトラ王国軍の再編に手を貸す必要がないわ。わざわざ敵を強くしてどうするの。それとも多少強くなったところですぐに潰（つぶ）

せると思ってるのかしら……にゃん」

ウェインは頷いた。

「最悪そうなっても武力制圧は可能だと考えてるだろう。でも向こうの狙いはそこじゃない。帝国にとってナトラは足掛かりでしかなく、その目的はあくまで西側への進出だ。そこで考えてみよう、大陸制圧のためには国が大量に用意すべきものは何になる？」

「何って、資金に食料に装備、それと……」

そこまで口にしたところで、ニニムははっと目を見開いた。

まさかという表情でウェインに目をやり、彼は

にっと笑った。

「そうさ、フィシュ・ブランデルの狙いは――」

◆◇◆

「ナトラの兵士を、未来の帝国兵として取り込む……!?」

「ええ、その通りよ」

ウェインとニニムが会話をしている同時刻。

あてがわれている館の一室で、フィシュは補佐官の言葉に首肯した。

「皇帝陛下の復調という喜ばしい報せは貴方(あなた)も聞

いたでしょう？　足踏みしていた西進政策もこれで動き出すわ。その時、精強な兵士は多ければ多いほどいい」

「……」

「一見すると、今回の取引は帝国（われわれ）だけが負担しているように見える。けれど遠からずこの国が帝国領になれば、軍の教導も資金の出資も先行投資になるでしょう？　こちらに損は無いというわけよ」

「待ってください、前提に疑問があります」

補佐官が声をあげた。

「ナトラが帝国に牙（きば）を剥（む）かない保証がどこにあるんです？」

その疑問はもっともだが、フィシュは既に答えを得ていた。

「彼が帝国に歯向かうことはないわ。今日の彼の提案こそが、それを証明しているのよ。考えてもみなさい。仮にナトラの兵士が帝国兵と同等の力量になったとしても、帝国が負けると思う？」

「それは……有り得ませんね。国力が違いすぎます」

「その通り。それは彼も当然解っているはずよ。じゃあ今日の提案の意味は？　ただ国内の軍部へのご機嫌取り？　いいえ、そんな浅いものじゃないわ。あれはナトラ王国民を守るための痛烈な一手だったのよ」

「どういうことです？」

「王太子は恐らく皇帝陛下の快復を知っていたんでしょう。そして当然私たちと同じように帝国の西進政策が進むことを予見し、考えた。帝国はナトラをどうするか？　武力による征服か、外交による降伏の二択。放っておかれることは有り得ず、どちらにせよ王国の歴史が終わる。ならば彼が望むのはどちらの結末かしら？」

補佐官の眼が見開かれた。

「あの提案は、我が国の武力制圧の可能性を遠ざけるのが狙いだったんですね……!?」

「ええ。事実、今のナトラは帝国にとってどうと

でも捌(さば)ける小国。武功を求める高官が武力制圧を推せば、そのまま通ることも考えうる。けれどこに未来の帝国兵がいるとなれば話は変わるわ」

「間違いなく外交による恭順(きょうじゅん)が第一手として取られますね……それを王太子が受け入れれば、ナトラ王国民の余計な血が流れることはない。それに武力制圧がなければ両国間の感情摩擦(まさつ)も極力薄くできます」

「対外的には帝国から一方的に利益(りえき)を得ることでその手腕をアピールし、今の臨時政権を落ち着かせる。それでいて帝国に呑まれる将来を見越して、穏便(おんびん)に着地させる準備をする。……見事な作戦よ」

全く感嘆する他にない。会議で感じた懐の深さ。そしてこの策略を巡らせる智謀（ちぼう）。あれで十六歳だというのだから末恐ろしい。

ナトラ王国が併呑（へいどん）された後、彼がどのような道を辿るのかは分からないが――もしも生きて野に下るというのであれば、是非とも帝国に迎えたいところだ。

しかしそうして感心しつつも、フィシュには一つの懸念があった。

（……本当に、彼の狙いはこれだけなのかしら）

補佐官に語った通り、今日の会議で彼の提案には実利があると気づき、受け入れた。

しかしその気づきをウェインは最初から想定していたはずであり、今の流れは間違いなく彼の思惑通りに進んでいる。ならば、この流れの中に他の罠（わな）を仕掛けは無いのだろうか。

（取引の詳細を詰める段階で、あらゆる隙（すき）は潰した。仕掛けるなんて不可能……そのはず）

だがもしも。

もしもウェイン・サレマ・アルバレストという人物が、自分の想像するよりもなお深く、広い視野を持っていたとしたら。

（認めるしかないわね……彼の器が本物だと）

捨てきれない可能性を想（おも）いながら、フィシュは

ウェインの姿を脳裏に思い描いた。

◆◇◆

「――ま、罠なんてないんだけどな！」

「急に何の話？」

「いや、今頃（いまごろ）向こうは疑心暗鬼になってるんじゃないかと思ってさ」

訝（いぶか）しむニニムに向かって、気にするな、とウェインは告げる。

「ともあれ解っただろ、なんで向こうが条件を呑んだのか」

「……理解したわ」
「でも納得はしてないって顔だな」
「当然でしょう」
不満を露(あら)わにニニムは言った。
「帝国から支援を引き出すことに成功しても、その行き着く先が国家の終焉(しゅうえん)なんて聞かされたんですもの」
そしてニニムは躊躇(ためら)い気味に口にした。
「……本当に国を明け渡すつもりなの？」
「当然そのつもりだ。……おい待て腕の関節を極(き)めようとするな」
無言で腕を取ろうとするニニムを押し留(とど)める。

「ニニムだって俺の帝国留学に付き合ったんだから解るだろ。帝国とは馬鹿みたいに国力差があるし、逆らっても余計に血を流すだけだ。それに留学中に帝国の統治を見て回ったけど、そんなに悪いものじゃなかったろ？　この国が帝国領になっても混乱は最初だけで、すぐに馴染(なじ)む」

「……本心は？」

「これで面倒な立場からおさらばだぜひゃっほお」

おおおああああ腕が腕が腕が!?」

「ウェインならできるでしょう。帝国を相手に立ちまわることだって」

「やだよ面倒くさい。……うおおおおおおお腕が曲がっちゃいけない方向に！」

そのままひとしきりウェインに悲鳴を上げさせた後、ニニムは諦(あきら)めたようにウェインから離れた。その背中に向かって彼は言った。

「そんなに嫌なら反逆するか？　俺を殺せば今回の話は流れるぞ。なあ、俺の心臓(しんぞう)よ」

「……心臓がそんなことをするわけないでしょ」

どれほど不満を言おうとも、どれほど反対しようとも、しかし最終的にニニムがウェインの決定に逆らうことはない。

彼女の祖先がこの地に辿り着き、王家に仕えることになった日から、それは決して覆(くつがえ)ることのない一族の誓いだ。

「そう拗ねるなよ。名残惜しい気持ちは解るけど、どんな国もいずれは無くなるもんだ。それが偶々俺たちの代だったってことさ」

「……王国軍の説得は本当にできるの？」

「最初は嫌そうな顔するだろうけど、今は雌伏の時とか言って帝国の強さを学ばせれば、逆らう気なんて自然と折れる。そんで時が来たら帝国に恭順。要所であるこの地は帝国の人間が統治するだろうから、俺は金をもらって悠々隠居！　我ながら完璧な計画だな！」

「……失敗すればいいのに」

ウェインは笑った。

「こういう悪だくみが俺の十八番（おはこ）だってことは知ってるだろ？　まあ見てろって。それとニニム」

「……にゃーん」

「よろしい」

自信満々な主君の様子に、ニニムは一層深いため息を吐いた。

◆◇◆

ニニムの思いに反して、物事はウェインの思惑通り進んだ。

帝国の教導を受けることに最初こそ反発があっ

たものの、ウェインの言葉巧みな説得によって予定通り軍の再編が実行に移される。

その結果は劇的だ。大陸でも屈指の強さを誇る帝国軍の手法を取り入れ、さらに帝国からもたらされた潤沢な資金を注ぎ込まれた王国軍は、みるみる内に成長した。

そして会談から三カ月後の今。

ナトラ王国軍は、以前と比べ物にならないほど精強な軍隊となっていた。

「いやー、つれーわー！　思い通り上手く行ってつれーわー！」

当然というべきか、この目に見える変化にウェ

インはご機嫌だった。

普段ならば執務室にいる時は文句と愚痴ばかりのウェインだが、今は鼻歌すら飛び出しかねない勢いだ。

「確かに王国軍の強化は順調ね」

釈然としない面持ちながら、彼の横に立つニニムもこの結果は認めざるを得ない。

「でも調子に乗って油断してると足元掬われるかもしれないわよ？」

「おいおい二二ム、掬われるって今更どこの誰に だよ？　大陸がひっくり返るような天変地異でも起きない限り、後はもう既定路線さ。隠居した後

に何するか考えてもいいぐらいだ」

「まったく……」

大陸一周旅行とかいいかもなー、などと妄言(もうげん)を口にするウェインに、ニニムが呆(あき)れた眼差(まなざ)しを向けていると、執務室の窓を外から小突く音が届いた。

音を鳴らしているのは一羽の鳥だ。窓の外にある止まり木から何度も嘴(くちばし)で窓を小突いており、その足には筒が結ばれている。ニニムが利用してる連絡用の鳥のうちの一羽だった。

ニニムは応じて窓を開けると、鳥の足首に結ばれた筒に手を伸ばして筒から伝文を取り出した。

「どうした？」

「帝国の密偵から緊急の連絡だわ」
「緊急の連絡？　なんだ、元気になった皇帝が早速軍を率いてどっかに攻め入ったか？」
「ええっと……」
ニニムは伝文を開き、書かれている文章に目を通す。
そして読み終わった彼女は、青ざめた顔で言った。
「……皇帝が、死んだわ」
「はぇ？」
ウェインは眼を瞬（しばたた）かせた。
執務室に奇妙な沈黙が落ちた。ウェインとニニムは微動だにせず、さながら突然荒野に放り出さ

れたか子羊のように、半ば途方に暮れた様子で視線を合わせていたが――やがて、ウェインが恐る恐る口火を切った。

「……ん、ん、んー、何か今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだが、多分恐らくきっと聞き間違いだと確信してるから、試しにもう一度言ってくれ二二ム。……なんだって？」

「アースワルド帝国皇帝が、死んだわ」

「……」

ウェインは顔を覆(おお)って天井(てんじょう)を仰(あお)いだ。

「そっかー……皇帝死んじゃったかー」

噛(か)みしめるように呟きながら、ウェインはゆっ

くりと息を吸い、

「はああああああああああっ!?」

叫んだ。

「死んだ!?　死んだ!?　死んだのあいつ!?　いやだって、この前快復してきたとか言ってたじゃん！　なあちょっとどういうこと!?」

「最近また少し体調を崩して、大事を取って休んでたはずが急に……って感じみたい」

「ご、誤報ってことは!?」

「帝国の方で正式に発表されてるそうよ。……しばらくは隠すこともできたでしょうけど、多分帝国の宮廷内で政治的な駆け引きがあったんでしょ

うね」

「ノオオオオオオオオオオ！」

ウェインは全力で頭を抱えた。

「ま、まずい。待て、ちょっと待て、どうなるんだこれは。えーっと皇帝が死ぬとナトラ（うち）への影響は……影響は……」

その時、乱暴なノックの音と共に有無を言わさず扉が開かれた。飛び込んできたのは、王国軍の伝令だ。

「失礼します、ウェイン殿下！　我が国に駐留している帝国軍が、突然移動を始めました！」

（ほわあああああああああ!?）

絶叫を心の中で留められたのは奇跡だった。しかし伝令はそんなウェインの内心に気づかず続ける。

「東の国境へ向かっている模様ですが目的地は不明！　また、ラークルム隊長が帝国軍を追うか否かの判断を求めています！」

伝令の言葉を聞きながらウェインは猛然と思考を働かせる。皇帝の死。国境へ向かう帝国軍。それらは間違いなく連動したものだ。

（だとするのならこの後に来るのは――）

ウェインの予感を裏付けるように、それは訪れた。

「お待ちを！　私が取り次いでまいりますので！」

「大使殿！　どうかお下がりください！」

「無礼は承知の上！　時間がないのです！」

開け放たれた扉の外から喧騒（けんそう）が届く。複数の人間が言い争いながらこちらへ向かってくる気配。二ムがそれとなくウェインと扉との間に立とうとするのを手で阻む。これから現れるのが誰か、ウェインは既に察していた。

「摂政殿下！」

近衛（このえ）の兵士たちを押しのけながら、荒い足音を立てて現れたのは、やはりというべきか、フィシュ・ブランデルだった。フィシュはウェインの姿を認めるや否やその場で跪（ひざまず）いた。

「一国の宮廷にてこのような狼藉（ろうぜき）を働き、申し開

きもございません！　しかし大至急お話ししなければならないことが！」

「……帝国軍が国境へ向かっていることは聞き及んでいる」

ウェインは冷たい眼差しをフィシュに向けた。

「帝国軍の指揮権は当然そちらにある。しかし事前に何も告げずに軍を動かすとは、いかなる了見か。互いに良い関係を築こうとしていたのは、私の思い違いだったか？」

（――って言うしかないよなあああああ！）

口にしている言葉と対照的に、ウェインは内心で悶えていた。

（解るよ！　めっちゃ焦ってるの解るよ！　でもここまで押しかけてきちゃダメだろ！　これじゃ周りに秘密にできないじゃん！　部屋の中で話し合えたらそっちの都合にだって合わせられたのに！）

この場にはウェインとフィシュ、ニニムは元より、先ほどの伝令や近衛が固唾（かたず）を呑んで見守っている。さらに騒ぎを聞きつけて他の家臣も集まってきているのをウェインは感じていた。

「その件につきましては、誠に申し訳ございません……！　しかし、決してナトラ王国を害そうという意図があってのことではないのです！」

「では、いかなる理由で彼らは動いている？」

「……本国からの指示です。一刻も早く、駐留している帝国軍を帰還させよと」

「何ゆえそのような指示が？」

「……」

フィシュが逡巡（しゅんじゅん）の表情を浮かべる。自らの知る重大な情報をここで口にすべきか悩んでいるのだろう。しかしウェインとしては彼女に言ってもらわなければ、自分はともかく周囲の人間を納得させられない。

「皇帝陛下が……御隠（おかく）れになったゆえのことです……」

どよめきが、さざなみのように広がった。

（……何てことなの）

頭を垂れた姿勢のまま、フィシュの胸中は痛恨の極みにあった。

それは皇帝の崩御や駐留軍の暴走に対して――ではない。

ウェインの目論見を看破できなかった、自分への悔恨である。

帝国では皇帝を信奉する人々は非常に多く、何を隠そうフィシュもまたその一人だ。

だから思いもよらなかった。いや、白状すれば考えたくなかったのだ。

王国軍の強化をしてる最中（さなか）に皇帝が崩御したらどうなるか、などと。

（けれどその甘さは王太子にはなかった。彼はここまで想定していた……！）

占領しているのならばいざ知らず、あくまで友好国に駐留しているだけとなれば、本国に政変があった時に帰還命令が出る可能性は極めて高い。

止めようにもフィシュは外交部署に所属する立場であって、軍部に要請はできても命令する立場にはなく、駐留軍の帰還を止めることはできないのだ。

そして駐留軍が去れば、ナトラ王国に残るのは、

帝国の資金で帝国式に鍛えられたナトラの軍隊である。少なくとも本国が落ち着くまでは、これを取り込むなどできるはずがない。

（西進政策が進むことしか私には考えられなかった。けれど王太子は、そうなった時のことと、そうならなかった時のことまで考えていた）

認めるしかない。彼の器は本物であり――自分はそれに負けたのだ。

心の中で悔しさとウェインへの賞賛がないまぜになるのを感じながらフィシュは思った。勝者たる彼は今、何を想っているのだろうか。その冷たい眼差しの奥に、どのような意思の光が瞬いてい

るのだろうかと。

その答えをフィシュが知ることは永久になかったが、

（完全に俺が帝国ハメた形になっちゃってるじゃんよおおおおおおおお！）

自分を負かした――と思っている――相手が内心でこんなに七転八倒（しちてんばっとう）してるなどとは、知らない方が良かっただろう。

「摂政殿下、我らに王国を侵犯する意思などなく、目的は本国への速やかな帰還です。どうか撤退をお許しください。彼らの行動はあくまでも主君の喪失（そうしつ）と忠義がためなのです」

伏したままフィシュは許しを請う。愚王ならばこれを機に撤退する帝国軍の背を討つなどとするかもしれないが、彼はそうはすまい。

「……事情は解った。忠を尽くす相手を失った将兵の心痛、憫察するに余りある。帝国へ真っ直ぐに帰還するというのであれば、これ以上我らは干渉すまい」

「感謝いたします、摂政殿下」

「なに、我が王国軍の教練が途中で終わるのは残念だが、帝国の大事となれば致し方ない。一刻も早く混乱が収まることを願っているぞ」

「……御言葉、有難く」

かくしてアースワルド帝崩御の報せは、瞬く間に大陸全土へと広まり、列国に大きな動揺と、野心の炎をかきたてることとなる。

なおこの日、「どうしてこうなったあああああ！」という沈痛な叫び声がナトラ王国の王宮にて木霊（こだま）したとされているが、詳細な記録は残されていない。

第二章　戦場にて王子は悩む

ヴーノ大陸の東部に位置するアースワルド帝国が、強い指導力を持つ皇帝（こうてい）と、皇帝に忠誠を誓う有能な武人と文官たちに率いられ、建国以来の黄金期を迎えていたことは、大陸全土が知るところだ。

帝国民たちは自らが帝国の民であることに誇りを持ち、今日より明日が輝かしくなることを疑わなかった。

しかしその展望は脆（もろ）くも崩れる。偉大な皇帝の急逝（きゅうせい）を原因とした各地の混乱の勃発（ぼっぱつ）。輝いてきた

はずの未来に暗雲が立ち込めつつあることを、全(すべ)ての帝国民が肌で感じていた。

ここで帝国が踏みとどまれるかは、皇帝を支えてきた能吏(のうり)たちの手腕にかかっているのだが――今の皇宮は、権力闘争の魔窟(まくつ)と化している。皇帝という太陽を失ったことで、抑え込まれていた権力の闇(やみ)がにじみ出てきたのだ。

無論、その状況に歯止めをかけようとする思いを抱く者はいる。

ナトラ王国より帰国したフィシュ・ブランデルもまたその一人だ。

（……だというのに、不甲斐(ふがい)ないわね）

皇宮の一室から出てきたフィシュは、小さくため息を吐く。

そこに駆け寄ってきたのは外で待っていた補佐官だ。

「大使、どうなりましたか？」

「しばらく謹慎（きんしん）してろとのお達しだったわ」

先のナトラ王国においてのフィシュの失態。その処分を下されるのが今日だった。

「良かった、予想よりも軽いものでしたね。きっと、大使のこれまでの実績によるものですよ」

「というより、私に構っていられるような状況じゃないというのが正解でしょうね」

ナトラにしてやられたとはいえ、所詮(しょせん)は小国の出来事。他(ほか)にやるべきこと、優先すべきことは、今の帝国にはいくらでもあるのだ。

そう、いくらでもある。もちろんフィシュにできることも。しかし、それをすることが今の彼女には許されない。

「今こそ帝国のために身を粉(こ)にしなくてはいけないのに……」

口惜しい。胸の中は自分に対する苛立(いらだ)ちでいっぱいだ。

「ダメですよ大使、謹慎中に何かしたら今度こそ重い処分が」

「もちろん解ってるわ。謹慎が解けるまで大人しくしてるつもりよ」

でも、と彼女は続けた。

「調べ物をするぐらいは大丈夫でしょう？」

「調べるって……何をです？」

「ナトラの王太子についてよ」

補佐官は困ったような顔になった。

「大使、してやられた気持ちは解りますけど、終わったことですから切り替えないと」

「そうじゃないわよ。私はあの少年に怒ってなければ憎んでもないわ」

フィシュの言葉は本心だ。

いっそ、それもこれもあの王太子のせい、と思ってしまえば楽だったのかもしれないが、今でもウェインに対する感情は好意的なものだ。彼は彼の最善を尽くし、自分は読み負けたのだと素直に認められる。

だからこそ思う。次は、次こそはと。

「私の勘だけど、あの王太子はさらに躍進する。もしかしたら我が帝国に牙を剥くことすらあるかもしれない。そうなった時に我が国が遅れを取らないようにしておきたいの」

「さすがに買いかぶりすぎな気もしますが……大使がそう仰るのなら、私も手伝いますよ」

フィシュは微笑(ほほえ)んだ。

「助かるわ。それじゃまずは、帝国に留学中の彼について調べることにしましょう。彼についてある程度は知っているけど、新しい発見があるかもしれないわ」

「解りました、では資料の閲覧を手配してきますね」

補佐官は駆けて行った。

フィシュは窓から外を見る。目に映るのは西のナトラ王国に繋(つな)がる空だ。

「さて……あの王子様は、今頃(いまごろ)どうしているのかしらね」

自らの好敵手となった少年のことを考えながら、

フィシュもまた廊下を進んで行った。

◆◇◆

帝国軍がナトラ王国から去り、二カ月が経った。

今、ウェインの眼下に整然と並ぶのは数百の兵士たちだ。

指揮官から下される指示で、素早く的確に行動するその姿は、まるで一つの生物だ。一挙手一投足から気迫が溢れ、見ているだけでも気圧されそうになる。

「いかがでしょう、ウェイン殿下」

「上々だ」

丘上の天幕から兵隊を眺めていたウェインは、家臣の言葉に満足げに頷(うなず)いた。

「帝国の教導(きょうどう)を失い、迷走するかとも思っていたが、よくぞここまで練り上げた。お前に任せたのは正しかったな、ラークルム」

「ははっ」

ラークルムと呼ばれた男は恭(うやうや)しく頭(こうべ)を垂(た)れた。

長身でしっかりした体格の男だ。それでいて威圧感がないのは、その朴訥(ぼくとつ)とした顔立ちによるものだろう。他に特徴といえば常人よりも長いその両腕か。彼はナトラ王国軍が抱える指揮官の一人

であり、ウェイン自身が見出(みいだ)した人材でもある。

「されど殿下、この件においては私は殿下の意思をくみ取り、従ったにすぎません。お褒(ほ)めの言葉を授(さず)かるに値するとは」

「それを十全(じゅうぜん)にこなせる家臣がどれほど得難(えがた)いか、解らないわけではないだろう。成し遂げたのは紛(まぎ)れもなくお前の功績だ」

「私を見出し、重用(ちょうよう)してくださったのは殿下であり、この任をお与えくださったのも殿下です。ならばこの結果は殿下の采配(さいはい)の賜物(たまもの)であり、私自身の功など砂の一粒ほどもありません」

「……全く、相変わらずだなお前は」

呆(あき)れた様子のウェインと一層頭を垂れるラークルム。

そこにくすくすと可憐(かれん)な笑い声が割って入った。

「ふふ、おかしいんだから二人とも」

そう口にするのはウェインの妹、フラーニャだった。

「すまないなフラーニャ。退屈だったか？」

「いいえ、綺麗(きれい)に動く兵隊さんは見てて面白(おもしろ)いし、二人の会話を聞くのも楽しいわ。でもねラークルム、せっかくお兄様が褒(ほ)めてくださってるんですから素直に受け取るべきよ。私だって滅多(めった)に褒められないんだから、羨(うらや)ましいぐらいだわ」

「だ、そうだぞラークルム」
苦笑しながら視線を向けると、ラークルムは困ったような顔になり、やがて言った。
「……両殿下のお言葉、有難(ありがた)く心に刻みます」
「ラークルムも我が妹にかかれば形無(かたな)しだな。見事だフラーニャ、褒めてやろう」
「あら、困ったわ。これで褒められるなら、ラークルムにはこれからも意固地(いこじ)でいてもらわなきゃ」
兄妹は大きく声をあげて笑い、ラークルムも小さく笑みを零(こぼ)した。
「ところでお兄様、最近ニニムの姿を見かけないけど、どうかしたの？」

「ん？　ああ、ちょっとニニムじゃないと任せられない仕事があってな。それに取りかかってもらってるんだ」

生まれた時からウェインに仕えることが決まっており、そのために英才教育を受けているニニムは非常に優秀だ。大抵の事はそつなくこなしてしまう。

「珍しいわ。仕事とはいえ、お兄様がニニムを傍(そば)から離すだなんて」

フラーニャの言葉は真実だ。ほとんどの時間において、ニニムはウェインの傍に控えている。

「仕方ない。他に任せられるのがいなかったからな」

ウェインとて不本意だ。なにせ彼女が仕事を手伝ってくれるかどうかで、山を歩いて越えるか飛んで越えるかというぐらいに違ってくる。今日この後、自分一人でこなさなくてはいけない案件を想(おも)うと、「うばー」と心の中で呻(うめ)いてしまうほどだ。

それならば他の人材に――というのもなかなか難しい。摂政(せっしょう)であるウェインだが、あくまでも国王の代役でしかない。家臣の大半は国王によって登用された人材であり、その忠誠心は当然ながら国家と国王に向いている。純粋にウェインに忠誠を誓い、その能力が国政に携(たずさ)わるのに足りている人材は、今のところニニムとラークルムぐらいである。

そしてラークルムが練兵に手を割いている以上、他に重要な事案があればニムを向かわせる他になかった。

「そのお仕事って、もしかして帝国についてかしら？」

「うん？　どうしてそう思ったんだ？」

「最近、帝国の武器をいっぱい買ってるって聞いたから」

ほう、とウェインは内心で驚いた。隠し立てしているわけではないが、フラーニャの耳にまで入っているとは。あるいはこの国難において、自分も何かしようと国政への関心を持ったのだろうか。

「確かに武器は買ってるが、ニニムに任せてるのはまた別だな。まあ無関係ってわけでもないんだが……」

フラーニャの頭を撫(な)でながらそう答えていたウェインの脳裏(のうり)に、一つ閃(ひらめ)くものがあった。

「そうだフラーニャ、どうして俺(おれ)が帝国から武器を買ってるか解るか？」

せっかく興味を持ったのだから、簡単な教材にするのも悪くない。問いかけられたフラーニャもウェインの意をすぐに理解したのか、すこし考えてから言った。

「……ナトラ王国で作った武器より、帝国の武器

の方が質が良いから？」

「正解の内の一つだな。とはいえこれはナトラが特別悪いのではなく、軍事大国だけあって帝国の方が特別質が高いんだ。他には？」

「まだあるの？　ええっと……」

フラーニャは眉根（まゆね）を寄せて考え込むが、なかなか答えが出てこない。やがて困ったような顔をウエインに向け、その微笑（ほほえ）ましい様子に彼は小さく笑った。

「あまり大きな声では言えないが、帝国に対する詫（わ）びだ。先日の取引で、少々ナトラ（うち）が持っていきすぎた」

「そうなの？　でもみんながお兄様の事を褒(ほ)めてるわ。帝国大使をやり込めたって」

我がことのように誇らしげなフラーニャだが、ウェインは頭を振った。

「他国との外交は、一方的に利益(りえき)を得ればいいわけではないんだ。特に帝国との国力差を鑑(かんが)みれば、余計な敵意を持たれるのはできるだけ避けなくてはいけない。これが二つ目の理由だな」

フラーニャは得心したように頷(うなず)き、それから首を傾(かし)げた。

「三つ目もあるの？　お兄様」

「ああ。それはな――」

ウェインが答えようとしたその時、
「失礼します！」
天幕に飛び込んできた伝令が、その場にいる全員に聞こえる声で叫んだ。
「マーデン王国が、我が国へ進軍を開始しました！」
フラーニャが驚きに目を見張った。
きたか、とラークルムは小さく呟いた。
そしてウェインは淡々と告げた。
「すぐに必要になるからだ」

◆
◇
◆

マーデンはナトラの西側に隣接する王国だ。隣国であるにも拘わらず、国家間の交流は民間レベルに留まっている。大陸の中間に位置するナトラ王国だが、政治や思想的には東寄りであり、西側の諸国とはあまり仲が良くないのだ。

国土の規模はナトラと同等であり、小国である。当然国力も同じ――だった。少し前までは。

均衡が崩れたのは、マーデン国内における金鉱山の発見が原因だ。それにより近年のマーデンの国力は大きく飛躍していた。

しかもその金鉱山は、ナトラとの国境に比較的

近い位置に発見されたのだからたまらない。ウェインは何度心の中で「ちくしょおおおおお！」と叫んだことか。攻め入って奪うことも真剣に検討されたが、最終的には立ち消えた。

そのマーデンが今、ナトラに攻め入ろうとしている。

他国との戦争は実に十数年ぶりだ。訓練と領内の取り締まりしか経験していない軍人も少なくない。さぞ関係者たちは浮足立っているだろう――と思いきや、宮廷の会議室に集まったウェインと武将たちの顔に動揺は無かった。

「まさしく、お言葉の通りになりましたな」

「殿下の慧眼（けいがん）に感服いたします」

彼らが落ち着いていられる理由は単純だった。ウェインはマーデンが遠からず侵攻してくることを読み、武将たちとその対策を練っていたのだ。

「そんな難しいことでもないさ」

答えるウェインの言葉は謙遜（けんそん）ではなく事実だった。

現マーデン国王の評判は良くない。その荒れた統治は隣国であるナトラにも届いている。それでいて政治的失策から目を逸（そ）らし、自らを名君であると肯定する奸臣（かんしん）ばかりを侍（はべ）らせ、諫言（かんげん）を口にする忠臣を遠ざける。それが一層国内の荒廃に拍車（はくしゃ）

をかけ、悪循環を起こしているのだ。

せっかく見つけた金鉱山も、その損失を補うことに利用されている有様(ありさま)だ。先代の王が賢君であっただけに民の失望は一際(ひときわ)強く、不満は大きい。

そんなマーデンにとってみれば、今のナトラの状況は千載一遇(せんざいいちぐう)の好機だろう。国力は格下で、目障(めざわ)りだった帝国軍は帰還した。戦果という解りやすい功績を得るのにうってつけだ。

もちろん全ては勝てればの話であり――そうさせないための準備を、ナトラ側は十分しているわけだが。

「国境の警備隊はどうしてる？」

「はっ。ご指示通り交戦を避け、敵軍の調査に専念させています」

「よろしい、それではマーデンの兵力はどの程度だ？」

「報告では七千ほどだそうです」

武将の一人が答えた。

「一万を切ったか。想定の中でも一番少ないところだな」

「カバリヌを警戒しての ことでしょう。あそこは血気盛んな国ですから」

マーデンと隣接している国はナトラだけではなく、カバリヌもその一つだ。もちろんマーデンの

金鉱山を羨(うらや)んでいるのも、ナトラだけではない。

他国を侵攻するにあたって、防衛にどれだけ兵を残して出兵するか。戦国の世において、このバランス感覚は決して尽きることのない悩みである。

「対して迎え撃つための我が軍の兵力は六千。少々届きませんな」

「それだけいれば十分だ。装備は行き届いているな？」

「はい。さすが帝国の武具は良いものが揃(そろ)っていますな。これならばマーデンの装備に劣ることはありますまい」

事前に侵攻を予測していただけに、軍議は半ば

確認と細部の詰め作業でしかない。

だからこそウェインは武将たちの言葉を耳にしながら、意識では別のことを考えていた。

（準備に不足はない。帝国辺りが余計な騒動を起こす前に動けたのは幸いだな）

皇帝の復帰による速やかなナトラ従属の道は断たれた。さらに聞くところによれば、帝国は三人いる皇子の誰が後を継ぐかで宮廷が割れ、内乱の気配すらあるとか。

しかしそれでもなお、ウェインは帝国は大国であり続けるとみている。その屋台骨が折れることはなく、国難を乗り越えて東の雄で有り続けるだ

ろうと。

いずれ必ずまた帝国に国を売る機会が訪れる。ならばその時までにすべきことは、ナトラの国力を高めることだろう。国の価値が高ければ高いほど、売る時の値段も高くなる。それが隠居(いんきょ)後のエンジョイライフを左右すると言っていい。

（帝国式に鍛えられたナトラの兵。この強さと価値を証明するために、マーデンとの戦争は丁度いい。他の国への牽制(けんせい)にもなる。問題は勝てるかどうかだけど――）

兵を鍛え、地理を調べ、戦術を練った。マーデン国軍の情報も収集してある。万が一にも負ける

ことはない。少なくともマーデン軍を叩(たた)き返すことはできるとウェインは確信する。

そして叩き返した後は速やかな講和だ。マーデンがこちらに侵略してきたのは、簡単に勝てると侮(あなど)っていたからこそ。藪(やぶ)を突いて蛇が出たとなれば、こんな不毛な国の土地を取りに来ることもないだろう。

（完璧(かんぺき)なシナリオだな……！）

以前の帝国との取引では、不幸な偶然が重なって目論見(もくろみ)が破綻したが、あくまで事故だ。今度こそ物事が自分の思い通りに進むことを予見し、ウェインは内心で小躍りした。

だが、もしもこの場にニニムがいれば、浮かれるウェインに周りを見るよう忠告しただろう。そしてウェインは気づいたはずだ。平然としている武将たちの根底に、緊張とは違う何かがあることに。

そもそも、ウェインが摂政となるまでのナトラ王国軍は、端的に言って不遇だった。

国王が軍部を粗雑に扱ったわけではない。しかし長い間戦争と無縁だったナトラにおいて、軍人が功績を立てられる機会はごく僅かだ。自然と宮廷における発言力は低下していき、挙句他国の軍人が我が物顔で国内を闊歩する始末。彼らの忸怩たる思いは相当だ。

しかし、ウェインがそれらを変えた。

言葉巧みに帝国式の教練法を入手し、さらにナトラから帝国軍を追いだし、帝国の武器まで買い揃えて配布した。もちろんその政策には、政権が不安定な今、軍部の好感度を稼ごうというウェインの目論見が含まれており、それは軍部も承知していた。

承知した上で、軍部はウェインに感謝していたのだ。彼が想像するよりもずっと。遥(はる)かに。

そこに来て、このマーデン侵攻である。

「今こそ、ナトラの剣としての役目を果たす時！」

「摂政殿下のご期待に応(こた)えずしてなにが臣か！」

といった具合に、武将たちのテンションは最高潮だった。

もちろん、初陣（ういじん）だというのに平然としているウェインな鼻息を荒くするのは無様（ぶざま）というもの。武将たちは表向き、努めて落ち着き払っており、それが結果として両者の温度差を隠していた。

（殿下に完全なる勝利を捧（ささ）げよう！）

（軽く一当てしてささと講和だ！）

かくして、ウェインと武将たちはすれ違いに気づかないまま、マーデン軍との戦いを迎えることとなる。

――何せ彼は勝利を確信している――の前で、そん

◆◇◆

ポルタ荒原（こうげん）はナトラ王国西部の国境付近の土地である。

荒原と呼ばれる通り、砂と岩だらけの不毛な地帯だ。春先のため雪は積もっていないが、真冬となれば一面が銀世界と様変わりする。

その荒原を今、七千の兵士からなるマーデン軍が進軍していた。

軍の指揮を預かるのはマーデン王国の将軍、ウルギオである。壮年の男であり、厳（いか）めしい顔つき

と鋭い眼差(まなざ)しは、さながら猛禽(もうきん)類のようだ。

「ふん。話に聞いていた通り、何もない場所だな」

馬の背から見られる景色を眺めながら、ウルギオはつまらなさそうに言った。

「宮廷の豚共の無能ぶりは度(ど)し難(がた)いな。こんな場所を切り取ったところで、何も得られまい」

「奴(やつ)らは自分たちが招いた失策から、民草(たみくさ)の目を逸らさせようと必死ですからなぁ」

苦笑いを滲(にじ)ませながら副官が応える。ウルギオは鼻を鳴らした。

「それならば、今回の遠征費用を民にばら撒(ま)いた方が目くらましになるだろう。そんなことも解ら

ない連中が政治を司(つかさど)っているとは、ますます度(ど)し難(がた)い」

「無能なあいつらがそんなことをしたら、勢いあまって我らの飯種(めしだね)まで配りそうですなぁ」

「その時は、豚共を丸焼きにしてやろう。臭くて食えたものではないだろうがな」

二人が大笑いしていると、騎馬が一騎駆け寄ってきた。

「伝令！　四十キロメートル東にてナトラ王国軍を発見！　こちらに進軍してきます！」

「むっ……」

ウルギオの目に光がよぎった。

「我らの予想よりも動きが早いですな」
「ふん。さすがは北の風見鶏(かざみどり)。機敏さだけは取り柄としてあるか。もっとも、足が早いだけで、槍(やり)を家に忘れてきてなければよいがな」
「しかし将軍、奴らは最近帝国に兵を鍛えられたと聞きます。油断すると手を噛(か)まれるやもしれません」
「案ずるな。鶏(にわとり)が鷹(たか)の飛び方を覚えたところで、所詮は鶏であることを、奴らはこれから身を以(もっ)て知るだろう。行軍の足を速めろ。獲物が自ら首を差し出しにきたのだ、さっさと片づけるぞ」
「ははっ！」

副官が指示を飛ばす姿を横目に、ウルギオは東へ意識を向けた。

経緯がどうあれ、自分はこの戦争の将軍として任命された。相手が虫けらのごときナトラ王国というのが物足りないが、功は功だ。せいぜい首を挙げさせてもらおう。

「少しは楽しませてくれよ、ナトラの弱兵ども」

この荒れた大地がナトラ軍の血で染まることを確信し、ウルギオは獰猛（どうもう）な笑みを浮かべた。

一方その頃（ころ）、ナトラ王国軍にもまたマーデン軍発見の報告が届いていた。

「想定からは外れていないな」

「はい。我らは予定通りこの先の丘に向かうとしましょう」

馬上で地図を広げるウェインに頷くのは、同じく馬に乗って隣を進む老境（ろうきょう）の武将だ。名をハガルといい、ナトラの将軍である。

今回のナトラ軍の総大将はウェインだ。彼自身は武功などに興味はないし、それどころか武官の手柄を奪いかねないため、可能ならやりたくないとすら思っている。

が、なにせしばらく振りの戦争だ。どんな不測の事態が起こるか解らない。武力以外のことで何か起きた時に

迅速(じんそく)に対応できるよう、自分がついていった方がいいだろうという判断である。

とはいえ、実際の戦場に出たことのない自分が指揮を執(と)るなどと言えば、さすがに兵士たちも不安になる。なので今回の戦争で実際に指揮を執るのはこのハガルだった。彼は元々他国の武将であり、有名な戦争にて何度も活躍した歴戦の名将である。

本来ならばナトラにいるような人材ではないのだが、数十年前、その華々しい人気を危険視した当時の主君によって命を狙(ねら)われ、逃亡の果てにナトラに流れ着いた過去を持つ。最近は一線から離れているものの、彼が指揮するとあれば、誰も不

満には思わない。

（しっかしまあ、軍が金食い虫ってのは本当だな）

指揮をハガルに一任しているため、実質的に神輿（みこし）でしかないウェインは、これ幸いにと軍で消費されている物資の種類と量を検証している。そうして感じるのは、とにかく軍を動かすのには金がかかるということだ。

支払う俸給（ほうきゅう）はもちろん、兵士たちが口にする水や兵糧。馬や馬に食べさせる飼葉（かいば）や武具。他にも雑多な生活用品が山ほど。それをひっくるめた諸経費の精算を帰国したらせねばならないと思うと、「ヴぁー」と死人のような呻き声が漏（も）れそうになる。

「如何(いかが)されましたか、殿下」
「ん、ああ……この戦争がどれほどで終わるかと考えていてな」
なにせ早く終われば それだけ出費も抑えられる。世の中には戦争大好きな国王もいると聞くが、きっと算術が得意ではないのだろうなとウェインは思った。
「ハガルはどう思う？」
「難しいところですな。戦(いくさ)というのは蓋(ふた)を開けてみなくては結果は解らないものですから。……なるべく早い決着を殿下はお望みで？」
「早く終わるに越したことはないとは思ってる。が、

それを求めるあまり勝利を遠ざけるようでは意味がない。そういう意味では……そうだな、俺が望むのは納得だ。たとえ時間がかかろうとも、この戦いこそが最良であったという納得が欲しい。どうだ？　ハガル」

「お任せください」

老人は孫ほどの少年に恭しく頭を垂れた。

「必ずや、会心の戦をご覧に入れましょう」

「期待しよう。さて、そろそろだな」

ウェインの見据える先に、小高い丘が見えてきた。

◆
◇
◆

ナトラ軍、兵六千。
マーデン軍、兵七千。
岩と砂だらけの荒野の上で、両軍は向かい合っていた。
両軍の距離は十分に離れているにも拘わらず、既に戦場の空気は張りつめている。これからこの一万余りの人々が、互いの命を奪い合うのだ。
「殿下、布陣が整いました」
丘の上に設営された天幕にて、ウェインはハガルからの報告に頷いた。
「マーデンの方はどうだ？」

「向こうも準備はできているようですな」
「後は開戦を待つばかり、か」
「はい。そこで殿下、よろしければ開戦前に、殿下の御言葉を皆に頂きたく」
「構わないが、戦う前に兵を鼓舞(こぶ)する効果は侮(あなど)れないものなのか？　ハガル」
「もちろんです。軍と軍の戦いは文字通りの死域の世界。肉体以上に心の柱がすり減っていきます。それが折れないよう支えるのが将の言葉なのです」
　歴戦の将がそういうのならば反対する理由も無かった。それに兵士をちゃんと気にかけているアピールをしておけば、クーデター防止の一助にも

なるだろう。

とはいえどのように語ればいいか。考えながら丘の麓（ふもと）に居並ぶ兵士たちの前に立ち、彼らの様子を目にした時、心は定まった。

「ヘーノイのトレイス」

ウェインが口にしたのは人の名前だった。

声に反応したのは、並んでいる兵士の中の一人だ。

突然王太子に呼びかけられたことに、驚きと戸惑いで目を白黒させている。そんな彼に向かってウェインは言った。

「槍、逆」

「え……あっ」

指摘された兵士が自らの手元を見ると、槍の穂先が地面に、石突きが空に向いていた。彼は慌てて槍を回して穂先を空へ向け、直立不動の姿勢に戻った。しかしその顔は真っ赤になっており、誰かが噴き出したのを皮切りに、周囲に笑い声が伝染した。

が、そこにウェインの言葉が突き刺さる。

「カールマン、パテス、リビ、ログリー、笑いすぎだ」

一際大きく笑っていた兵士たちが、ギョッとして口をつぐんだ。その様子がまた滑稽で、しかしここで笑えば自分たちが名指しにされるため、兵

士たちは口を閉じたまま肩を震わせた。

（どうやら、緊張は解けたみたいだな）

先ほど一目見てウェインは彼らが強い緊張の中にあるのを感じ取った。

無理もない。自分も含めて、まともな戦場などを初めての人間が大半だ。いくら訓練を積んでいるとはいえ、実践でしか学べないものは確かに存在する。

ともあれこで第一段階はクリアした。ならばあとは士気を高めるだけだ。

「今日まで、我がナトラ軍は弱兵のそしりを受けてきた。あるいは、それは事実だったかもしれない。

向こうのマーデン軍も我らをそう侮(あなど)っているだろう」

ウェインの声が兵士たちの間に響き渡る。

「だが、俺は知っている。お前たちが過酷な訓練を耐え抜いたことを。俺は知っている。お前たちが誰よりも気高い勇気を持っていることを。俺は知っている。侵略者を前にしたその心に、消えぬ炎が灯(とも)されていることを。――ならば、今のお前たちが弱兵である理由など、一つたりとも存在しない」

弛緩(しかん)(こうよう)した空気から一転。兵士たちに燃えるような高揚が生まれる。その熱をさらに煽(あお)るべくウェインは声を張り上げた。

「この一戦で証明せよ！　我らが北方に座(ざ)す竜で

あると！　大陸に響かせよ！　我らが地上最強の軍隊であると！　征(ゆ)くぞ！　今こそ歴史を塗り替える時だ！」

「「オオオオオオオオオオ！」」

天地を揺るがす歓声が響いた。

どうやら士気の向上はできたようだ。内心で一息ついていると、ハガルが馬を寄せた。

「お見事でした、殿下。私の激(げき)ではここまで火はつかなかったでしょう」

「少なくとも、緊張して武器を落とすことはなさそうだな」

ウェインの軽口にハガルは小さく笑った。

「時に、先ほど名前を呼んでいた兵士たちは仕込みですか？」

「馬鹿（ばか）を言え、即興（そっきょう）だ」

「ではたまたま名前を？」

「だいたい覚えてるだけだ。数十万も抱えているつくるめても一万程度だしな」

帝国じゃあるまいし、ナトラの兵士なんて全部ひ

「……」

ハガルはとても奇妙な表情を浮かべた。

沸き立つナトラ軍の様子に、ウルギオは忌々（いまいま）しげに舌打ちした。

「風見鶏風情が喚き散らすわ」
「将軍、こちらも攻撃準備は整いました」
「うむ」
ウルギオは苛立ちを鎮め、整然と並ぶマーデン兵士たちに向き直った。数千の視線が集まる中、短気なところなど見せるわけにはいかない。
「聴け！　マーデンの勇士たちよ！」
兵士たちの腹の底まで震えるような声でウルギオは叫んだ。
「あれなるはナトラの雑兵である！　勇気と蛮勇をはき違え、愚かにも我らの進撃に歯向かおうとするつもりだ！　だが北の田舎者がどれほど集ま

ろうと、真の精兵たる我らに勝てる道理など一つもない！」

ウルギオは剣を掲げ、呼応するように兵士たちも各々の武器を空に向けた。

「蹂躙（じゅうりん）せよ！　奴らの血でこの荒野を染め上げるのだ！　全軍、攻撃開始い――！」

七千の人間からなる咆哮（ほうこう）が空に木霊（こだま）し、一斉に地を蹴（け）った。

「きたか」

マーデン軍が動いた。それはまるで人で造られた津波だ。後方の本陣にいてもなお、刺すような

圧力をウェインは感じた。

「全隊、構え！」

ハガルの指示により、ナトラ軍の歩兵たちが一斉に盾（たて）と槍を構える。攻め入るマーデン軍に対して、こちらはあくまで守備。その場を動かず迎え撃つ態勢。あちらが津波ならば、こちらは堤防だ。

マーデン軍が迫る。チリチリと肌が焼けつくようだ。

勝てる。勝てると確信している。が、それでも不安を抱いてしまうのが人の性（さが）だ。表向きは泰然（たいぜん）と戦局を見ているように装いながら、ウェインは内心で祈っていた。

（頼むぞー、上手くいってくれ）

両軍の距離が狭まる。加速度的に上がる心拍数。

そして津波と堤防の先端が――

「――ん？」

その瞬間、ウェインとウルギオは揃って目を見張った。

（おい……おいおいおい……！）

（ち、ちょっと待て……!?）

自らの目に映る光景に、両軍を挟んだ対極の位置にいる二人は、奇しくも同時にこう思った。

（（これは一体、どうなってる……!?））

◆◇◆

この戦場において、ナトラ軍が組んだのは典型的な横陣（おうじん）だった。

上空から俯瞰（ふかん）すれば、長方形の陣形がマーデン軍に対して横向きに敷かれているのが解っただろう。

対するマーデン軍も横陣の構え。ただし厚みを均等にしたナトラと違い、陣形の中央に兵力を割いている。中央を突破した後、反転して背後から一気に崩してしまおうという魂胆だ。

言うまでもなく、人間というのは側面や背面からの攻撃に弱い。それは規模が軍隊になろうとも同じことだ。ゆえに、敵軍の背後を取れれば、それは極(きわ)めて有利な状況といえる。

当然ナトラとしてはマーデンに応じて中央を厚くしたい。しかしここで純然とした兵力差が響いてくる。ナトラ六千対マーデン七千。数字的にどちらが有利かは明白だ。

そう、あくまでも数字的には。

兵の練度という、単純な数値では測れない要素が戦場にはあるのだ。

「ウルギオ将軍！　左翼の□シナ隊から救援要請

が！」

「伝令！　サンセ隊が壊滅！　トロジー隊が援護に回っています！」

「将軍、右翼も苦戦してる模様です！」

矢継ぎ早に戦場の各所から届く情報は、その全てがマーデン軍の劣勢を伝えていた。

「馬鹿（ばか）な……」

ウルギオの口から零（こぼ）れたのは、状況へ対応するためのものではなかった。

しかしその言葉は、ここにいる全員が抱いていた困惑だった。

「なんだ、このナトラ兵の強さは……!?」

（マーデン弱っぇぇぇ

実に表れていた。

目の前の敵を討(う)つべく、ひたすらに武器を振り回すマーデン兵。そこには仲間との連携といったものはほとんどなく、半ば一人で戦っているようなものだ。

しかしナトラ兵は違った。たとえば敵が苛烈(かれつ)な攻撃を仕掛けてくれば盾で防ぎ、代わりに傍(そば)の仲間が攻撃に転ずる。逆に敵が防御を固めれば、仲間と連携して防御を崩す。そうしながら陣形を維持し、孤立せず、徹底して互いをサポートし合える位置で戦っている。

そう、見比べてしまえば明白なのだ。たとえ数

は劣っていても、軍隊として圧倒的にナトラ兵が格上なのである。

「如何（いかが）されました、殿下」

ウェインの戸惑いに気づいたハガルが言葉を向けた。

「……いや、こちらの予想以上の奮戦（ふんせん）に驚いてな」

ウェインとて勝てるとは思っていた。しかしこの展開は予想の上を行く。

「ハガルはこうなると解っていたのか？」

「はい。物事に対する創意工夫というのは、必要があればこそ洗練されるものです。その点において、長年戦い続ける帝国が積み上げた兵士の鍛え方は、

大陸で最も優れた教練の一つに位置するでしょう。事実、拝見した私も感銘を受けました。この方法で鍛えられたのならば、小(こ)競(ぜ)り合いしか知らない小国の兵に後れを取ることはない、と」

とはいえ、と老人は苦笑した。

「ここまでマーデンが弱兵とは私も少々驚きです。あるいは計略の布石(ふせき)かともも考えましたが、この様子ではそれもないでしょう。ですが殿下」

「ああ、あの話については忘れてない。……今のうちに削れるだけ削らなくてはな」

その時、右翼の方で一際大きな歓声が上がった。突撃を跳ね返されて足が止まったマーデン兵に対

して、右翼のナトラ兵が襲い掛かったのだ。
「どうやらラークルムが動いたようですね」
ナトラ兵とマーデン兵がぶつかり合う右翼の最先端。
怒号と悲鳴。血の匂いと死体で溢れかえるその只中に、騎馬に乗ったラークルムはいた。
「連携を崩すな！　仲間と連動して動け！」
「防御を固めろ！　補充部隊を送れ！」
「マーデンの奴ら、腰が引けてるぞ！　押し返せ！」
指示を飛ばすのはラークルムの部下の指揮官たちであり、受け止めるのは兵士たちだ。

ウェインたちが感じていた圧倒の手ごたえは、前線にいる彼らもまた抱いていた。

戦える。通用する。むしろ押している。それは帝国式に鍛えられた辛(つら)い日々に対する肯定を意味し、自然、士気はさらに上がっていく。

その士気の高さがさらなる指揮官の指示の鋭さと兵士の奮起を呼び、マーデン兵を一層押し返す。

今、ナトラ軍はノっている。もはや疑いようもないことだ。ゆえに指揮官たちは、右翼の将であるラークルムに進言した。

「ラークルム隊長、好機です！　打って出ましょう！」

「今なら敵の防御を崩して裏を取れます！」

「ラークルム隊長！」

矢継ぎ早に繰り出される進言に、しかしラークルムは俯（うつむ）いたまま反応しない。

指揮官たちが目を見合わせる。訓練において、好機だろうと劣勢だろうと淡々と的確な指示を出していくラークルムの姿を彼らは知っており、それは今の彼の姿と符合しない。何かあったのだろうかと、指揮官の一人がおずおずと手を伸ばした。

「隊長……？」

その手が彼の肩に触れると同時に、ラークルムは顔をあげた。

指揮官たちは思わずギョッとした。

ラークルムは、泣いていた。

大の大人が戦場で、部下の目があるのも構わず、双眸（そうぼう）から涙を流していた。

「ら、ラークルム隊長、一体」

なにが、と言いかけて。

瞬間、ラークルムの喉（のど）から凄（すさ）まじい咆哮が飛び出した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！」

人間のそれとは考えられないほどの大音声（だいおんじょう）が、右翼にいるナトラ兵とマーデン兵の心胆（しんたん）を震わせた。彼らは一様に戦いの手を止め、思わず声の方

角――すなわちラークルムを見た。

「私は……私は悲しい」

全兵士が注目する中、ラークルムの馬が前に出た。

「この戦は、栄(は)えあるウェイン・サレマ・アルバレスト摂政殿下の初陣……あの御方が歩む輝かしき道のりの第一歩……だというのに……だというのに」

朴訥な男の目に激情が宿る。溢れんばかりの怒り。見据えられるマーデン兵たちの体が震えた。

「なんだこの塵芥(ちりあくた)は……まるで雑草の駆除ではないか。こんなはずでは無かった……強く、狡猾(こうかつ)で、名のある獲物の血を捧げてこそ、殿下が纏(まと)う光輝

の一片になりえるというのに……」

不意にラークルムが馬を下りた。

そのままつかつかと、無人(むじん)の野(の)を征くがごとく、立ち尽くすマーデン兵の前に立つ。

目の前に敵将が泣きながら一人で立つという異常事態に、マーデン兵は茫然(ぼうぜん)としたままだ。

「ああ、殿下……臣の不徳をどうかお許しください」

瞬間、ラークルムの長い両腕が鞭(むち)のようにしなった。

爆(は)ぜるような音が鳴り、ラークルムの前に立っていたマーデン兵の顔面が弾(はじ)け飛び、その肉体が宙を舞った。

「――せめて、この塵芥どもで亡骸（なきがら）の山を作りましょう」

そうしてようやく、その場にいた全員が我に返った。

「そ、そいつを殺せぇー！」

「ラークルム隊長に続けぇー！」

自分に向かって殺到するマーデンの兵士に、ラークルムは篭手（こて）に納められた拳（こぶし）を握り固めた。

「ラークルム隊、敵を押しています！　敵陣の崩壊も目前かと！」

伝令の報告に、ウェインは満足げに頷いた。

（あいつたまに暴走するんだけど、今回は大丈夫そうだな。よかったよかった）

自分が直接見出したからなのか、ラークルムは妙な忠誠心の持ち方をしている。それが本番でこじれないかと若干不安だったが、この様子なら大丈夫そうだ、とウェインは思った。

なお、後日詳細な報告を聞いて「馬下りて殴りかかるとか何やってんだあいつ……」とドン引きすることになるが、今のウェインには知る由もない。

（しかし、まずいな）

各所から優位であるという報告が相次いでいる。だというのに、ウェインの内心には曇りが渦巻

いていた。

（マーデンがさっさと見切りをつけて撤退してくれればいいんだけど、そうじゃないと……）

などと思い悩んでいると、ハガルの眼光が鋭くなった。

「殿下、兵の糸が切れ始めました」

うげぇ、と思わず漏れそうになった声を飲み込んでウェインは言った。

「間違いないか？」

「はい。……戦場が動きます。殿下も御心の備えを」

わかった、と短く頷きながらウェインは対陣を見据える。

その脳裏には、出発前にハガルに言われたことが思い起こされていた。

◆◇◆

「ナトラ兵が長くは持たない？」

「はい」

軍議の場にて、ハガルは淡々とウェインに告げた。

「帝国の教えにより、ナトラ王国軍は見違えるほど強くなりました。恐らく、開戦してしばらくはマーデン軍に対して優位を取れるでしょう。しかし三刻もすれば、その調子の糸が必ず切れます」

「なぜだ？」

「戦場を知らぬ兵が大半だからです」

ハガルは断言した。

「空気の冷たさ、流れ出る血、ぶつけられる殺意……戦場において心は肉体以上にすり減ります。すると視野が狭くなり、周囲の音が耳に入らなくなります。仲間との連携や命令への反応も鈍（にぶ）くなるでしょう。そうなれば我が軍の強さは半減すると言ってよいかと」

「あれだけ訓練してもか？」

「どれだけ訓練しようとも、です」

ハガルは小さく頭を振った。

「身を以(もっ)て体験しなくては解らないことが、戦場には多すぎるのです」

「……となると粘りはマーデンの方が上か。小競り合い程度とはいえ、戦争は体験している」

「はい。そしてよほどの愚将でない限り、こちらの糸が切れた隙(すき)を見逃すことはないでしょう。今回の戦争は、そうなるまでにどれだけマーデン軍の兵を削れるかが分岐点になります」

「できればよほどの愚将であることを期待したいところだな」

ウェインは嘆息しながらそう言った。

◆◇◆

もちろん、そんな一方的なウェインの願いが届くはずもなく、

（――圧力が落ちた！）

ナトラ軍の変調を、ウルギオはすぐさま感じ取った。

「将軍！」

「解っている！　十秒待て！」

ナトラ六千対マーデン七千で始まったこの戦い。

緒戦の劣勢によって今の戦力はおよそ五千対五千。ほぼ同等にまで落ち込んでいる。

ナトラ軍の圧力が落ちた今ならば、こちらの方が強く出られるだろう。

だがダメだ。それでは足りない。恐らく削り切れずに日の入りを迎え、仕切り直しになる。そうなれば気力体力を回復させたナトラ兵とまた戦わなくてはならない。

（好機は今ここだ。ここしかない。ならば――）

（これはヤバい）

一方でウェインの焦燥（しょうそう）は最高潮に達していた。

理由はナトラ王国軍の勢いが衰えたことだけではない。

それによって、マーデン軍に逆転の一手が生じてしまったためだ。

修正しようにも時間がかかる。もしもその間に相手に動かれてしまったら――

（頼むから気づいてくれるなよ……！）

ウェインは心の中で天に祈った。

だがウェインの祈りもむなしく、素早く戦場を見渡したウルギオの目はそれを捉（とら）えた。

（正面が、薄い……？）

陣形を保とうと踏ん張っているナトラ軍。その中心部の兵力が減っている。

なぜ。理由を求めた脳裏はすぐさま回答を導き出す。こちらの左翼を崩すため、ナトラ軍は右翼側に中央の兵力を回したのだ。しかし攻め切る前に軍の勢いが落ち、結果として中央を薄くしたまま膠着状態（こうちゃく）に入ってしまったのだろう。

ウルギオの脳裏に勝利までの絵図（えず）が浮かぶ。いける。確信を抱いた瞬間、彼は叫んだ。

「両翼の将に、そのままま乱戦に持ち込み相対してる敵部隊を足止めしろと伝えろ！　中央は陣形の再構築だ！　完了次第突撃する！」

「はっ！　狙う場所は!?」

「決まっている」

ウルギオはぎらつく目を彼方（かなた）に向けた。

「総大将の首だ！」

（ああくそっ！　来るんじゃねーよ！）

放たれたマーデン中央軍の突撃。

騎馬を主軸にしたその一撃が、兵が減ったナトラ中央軍の陣形に深々と食い込んでいた。

マーデンは止まらない。陣形の傷口から押し込んでくる。防ごうにも兵がなく、乱戦状態となった両翼から兵を呼び戻すこともできない。

中央が突破される。その数は千人ほどだろう。

対して丘の上にはウェインとハガル、そして百人

程度の近衛（このえ）しかいない。

「殿下、後退いたします。お早く」

「解ってる」

もはやこれしか道は無い。

ハガルの指揮の下、ウェインたちは後退を開始した。

「将軍！　奴ら本陣から逃げて行きます！」

「無様（ぶざま）な、潔（いさぎよ）く散ればいいものを。敵は少数だ、追うのは騎馬だけでいい！　歩兵は中央の足止めをさせておけ！」

「ははっ！」

ここでウルギオは歩兵を分断。およそ四百騎の騎馬隊だけでウェインたちの背を追いかける。

瞬く間に丘を駆けあがり、本陣があった場所に到達。捉えたのは、丘の背後にあるいくつもの岩山と、その一つの陰に潜り込もうとする近衛部隊の姿だった。

「さらに逃げ隠れするつもりか……だが大半が重装歩兵なのが裏目に出たな！」

ナトラの本陣にいた近衛の大半が盾と槍を備えた歩兵だ。それでは馬の脚から逃げきることはできない。

「奴らが岩に隠れる前に背を討つ！　行くぞ！」

ウルギオは再び檄（げき）を飛ばし、騎兵を引き連れて丘を駆け降りる。

近衛部隊との距離は瞬く間に縮まり、観念したのか、近衛たちは足を止めて反転。ウルギオたちに向かって防陣を構築する。

だがその防御はあまりにも薄い。衝突すれば一撃で突破できるだろう。

ウルギオは勝利の確信と共に雄叫（おたけ）びを上げ――

「だから来るなって言ったのに」

ウェインは、誰にも聞かれぬよう悪態（あくたい）を吐（つ）いた。

「これじゃ、完勝しちまうだろうが……！」

そしてニニム・ラーレイは、兵たちに指示を出した。

「――弓隊、放て」

岩山の上から、マーデン兵目がけて矢の雨が降り注いだ。

◆◇◆

「――大使、大変です！」

フィシュの自宅に補佐官が飛び込んできたのは、ナトラとマーデンが開戦したという情報に目を通

していた最中のことだった。

「どうしたのそんなに慌てて」

「例の王太子について、とんでもない資料を入手したんです！　これを見てください！」

補佐官が突きつけられた資料を受け取り、フィシュは視線を落とす。

「以前閲覧した王太子の資料に、妙な欠落がある と大使は言っていたじゃありませんか。その答えがこれだったんです！」

補佐官の言葉を耳で受けながら資料を読み進めていたフィシュは、目を見開いた。

「士官学校に在学……!?」

「ええ、あの王太子は二年間、我が帝国の士官学校に通っていたんですよ！」

まさかという気持ちがフィシュの中で強く渦巻く。しかし資料は間違いなくそれを事実だと告げていた。

「軍機（ぐんき）の塊（かたまり）ともいえる士官学校に、どうして属国でもない国の王族が……」

「詳細はまだ解りませんが、周囲には王太子として人間として通っていたようです。教師などは彼の身分を知っていた節がありますが」

「彼はどうやって入学を？」

「帝国にいるフラム人の高官が便宜（べんぎ）を図ったようです。フラム人にとって、ナトラ王国は迫害されていた自分たちを早くから受け入れてくれた国ですからね。帝国で立場を得たとはいえ、同族を多く庇護（ひご）している国の王族には思うところがあったのかと」

ありそうな話だ。フラム人の同族意識は特に強い。

しかし腑（ふ）に落ちない点がある。

「けれど、そうだとしても資料から情報を削除するほどかしら？　確かに問題ではあるけれど」

「ところがそれだけじゃ無いんです。続きを見てください」

補佐官に促され、フィシュは資料のページをめくる。そこにあったのは、学校で行われた過去二年間の試験の結果だ。

「これは……」

フィシュは我が目を疑った。文学、歴史、数学、剣術、戦史――学校で課されるあらゆる試験で優秀な結果を出し、主席の位置に立つ一人の生徒の名前が塗り潰されていたのだ。

「入手した時点でそうなっていました。その主席の存在は、意図的に消されたんです」

なぜそのようなことをしたのか。

抱いた疑問に向かって、雷鳴のごとき閃きが落

ちた。

「消したのは、これが理由なのね。外国人、まして他国の王族が、他の帝国人を差し置いて頂点に君臨していたという不名誉を、無かったことにするために……！」

なんということだろうか。こんな馬鹿げたことがあるだろうか。

帝国は自らが育てあげていたのだ。己（おのれ）の喉元（のどもと）に届きうる牙を。

そしてその牙の名前こそが。

「ウェイン・サレマ・アルバレスト……！」

◆◇◆

眼下のマーデン兵たちは総崩れの状況だった。

どれほど精強を誇る軍であろうとも、奇襲を受ければ浮足立つ。まして頭上から間断なく矢が降ってくる中で、冷静でいられる人間などどれほどいようか。

いるとすればそれは相応の訓練と実戦を経た指揮官や兵士くらいであり、この状況で彼らが真っ先にすることといえば、将の周りを固めることだろう。

それゆえに、岩山の上から見つめる二二ムの目には、

敵将の居場所が手に取るように分かった。
「弓隊はそのまま敵兵を追い散らしなさい。騎馬隊、行くわよ」
「はっ！」
ニニムの号令の下、隠れ潜んでいた騎馬隊が一斉に岩山を駆け降りた。
動揺し統率が取れず、足も止まっているマーデン兵に成す術（すべ）はない。突撃してきた騎馬隊に次々と討ち取（と）られていく。
「順調ですね、隊長！」
「当然よ。そうなるよう崩したのだから」
淡々と答えながら、ニニムは自分がここにいる

ことになった発端について思いを巡らせた。

「――兵を伏せておく？」

「そ」

マーデンが侵攻を始める半月ほど前。

会議室にて、ウェインはニニムにそう告げた。

「もうじきマーデン軍が攻めてくる。互いの進軍速度の予測からしてぶつかり合う場所はここ、ポルタ荒原だ」

机の上に地図を広げ、ウェインはその内の一点を示す。

「ポルタ荒原は岩山や丘が点在してて、兵を隠すには

うってつけだ。ここに予(あらかじ)め兵を伏せて、奇襲に使う。で、その指揮をニニムにやってもらいたい。軍部の方にはもう話を通してある」

「……疑問がいくつかあるわ」

ニニムが手を上げて言った。

「まず、マーデンが攻めてくるのは間違いないの？」

「間諜(かんちょう)からの報告を纏(まと)めるとそこに収束する。間違いなく一カ月以内にマーデンは攻めてくる」

「隠す兵の数は？」

「信頼できる奴を選抜して、だいたい七百から千程度。これ以上の大兵力は隠しておけないし、こちらの兵力が用意できるはずの数よりだいぶ少な

ければ、相手も警戒をするからな」
「その数だと本当に奇襲用ね」
「ああ。相手の主力を釣りだしたところで側面を突く……って使い方が理想だな。実際どうなるかは戦況次第だけど」
「実際に出陣してから先行して隠すのじゃダメなの？」
「本隊には向こうの間諜も入ってるだろうから、出陣してから分離させるとどこかに伏せていることがバレる。それじゃ奇襲の効果は薄い」
ウェインの滞（とどこお）りのない返答に二ムは頷いた。
ここまでは問題ない。が、一番気になるのは次だ。

「最後に、私がやる理由は？」

「あっれー!? ニニムさんできないのー!? いつもエリート風吹かして何でもできますよみたいな顔してるのにそっかー！ できないんだー！

……あ、やめ、痛っ、痛い！」

「真面目（まじめ）に」

「解った、解ったから俺の指をあらぬ方向に曲げるのはやめろって！」

ニニムから解放された手を振りながらウェインは言った。

「そんな複雑な理由じゃない。これをこなすには、一カ月間、千人弱の兵士の息を潜めさせる統

率力が必要だ。だが、有力な将をここで使うと本隊の運営に差し支えるし、この大一番に姿が見えないことで相手に警戒される可能性もある。その点、ニニムなら統率できるし、姿が見えなくても軍事的脅威には思われないだろ？」

「確かにそうね」

ニニムは対外的にはウェインの補佐官であり、文官だ。しかし軍を率いる将としての教育も受けている。兵士たちの方も、代々王家を支える一族のニニムを軽んじることはそうそうしない。

「というかもっとハッキリ言うと、ニニムとラークルム以外の将はいまいち信用がな。あいつらが

忠誠を誓ったのは親父と親父が運営していた王国であって俺のじゃない。こういう気配りが必要な役割を振るのはまだ微妙だ」

「そんなことはないと思うわよ。彼らはちゃんとウェインに忠誠心を持ってるわ」

「いーや！　そうやって油断してるとすぐクーデターされる！　歴史が証明してることだ！」

警戒心を剝き出しにし、いもしない敵に向かって威嚇するウェインに、ニニムはやれやれと内心で頭を振った。この様子では、ウェインと武官との間に信用という名の架け橋が繋がるのはまだ遠そうだ。

「まあ、どうしても無理そうなら俺がやるって手もあるけどな。ニニムならば俺がいない間の政務の采配もできるし」

「それは……さすがに有り得ないわ。ウェインがいなくなったら誰が本隊の指揮を執るのよ」

「いや、そもそも今回の戦じゃ指揮の方はハガルに預けるつもりだ。軍人が功績を上げるせっかくの機会に水を差したくないしな」

「……大丈夫なの？」

「ハガルの爺さん滅茶苦茶強いから安心しとけって。特にあの人の野戦はヤベーぞ。もしぶつかり合うことになったら俺は即行逃げる。――と、話が

逸(そ)れたな」

ニニムは頷き、本題の結論を言った。

「やっぱりウェインにそんなことをさせるぐらいなら、私がやるべきね。いいわよ、兵を引き連れて潜伏しとく」

「任せた。活躍する機会があるかどうかは半々ぐらいだけどな。俺としては、ほどほどに勝てればいいし」

「そこは圧勝を望むところじゃないの？」

「勝ちすぎるとそれはそれで問題なんだよ。……まあ、そんなことは起きないだろうから別にいいや。早速準備を始めようぜ」

ニニムは頷いた。潜伏場所の選定。兵の選抜。潜伏最中の食料の手配等、やることは多く、全て秘密裏にこなさなくてはならない。

ただ最後に一つ、ニニムは懸念(けねん)を口にした。

「ちなみに……私がいなくてちゃんと仕事回る？」

ウェインはにっと笑った。

「帰ったら修羅場(しゅらば)だ」

（……どれだけ仕事が溜(た)まっているのやら）

苦笑を浮かべながらニニムは部下と共に馬を走らせる。

ニニムたちが目指すのは、一塊になって離脱し

ようとする数十人のマーデン兵たちだ。その中心に敵将――ウルギオの姿はあった。

「て、敵が来るぞ！」

「将軍をお守りせよ！　前を固めるんだ！」

マーデン兵たちは急いで防御を固める。しかし、

「――薄い」

二二ム率いる騎馬隊は、呆気(あっけ)なくその防御を吹き飛ばして突入した。

抵抗するマーデン兵を蹴散(けちら)し、勢いを殺すことなく二二ムたちは中心へ。そこにいたウルギオは迫る敵兵に向かって剣を振るうが、馳(は)せ違いざま、逆に腕を切り落とされて落馬した。

「ぐっ、がああああ……！」

痛みにウルギオが絶叫する中、ニニムは馬を止め反転。周囲をナトラ兵に守らせながらウルギオを見下ろした。

「貴方(あなた)が将ね？」

汗と泥、そして苦悶(くもん)に汚れながらウルギオはニニムを見上げる。

「そ、その声……それに白い髪……」

「降伏しなさい。すぐに治療すれば、助かる見込みはあるわよ」

ニニムの淡々とした勧告に、しかしウルギオは激高(げっこう)した。

「降伏……降伏だと……!? ふざけるな！」

腕の傷口から血が溢れ、今にも絶えそうなほど呼吸が荒れてなお、ウルギオは吼(ほ)えた。

「俺はマーデンの将軍だ！ 女、それも灰被(はいかぶ)りごときに降伏などできるか！」

「そう」

二二ムの剣が振り抜かれた。

剣の軌跡はウルギオの首を通過し、一拍遅れて、その首が滑るようにして地面に落ちた。

「首を掲げて討ち取ったことを触れ回って。……それと、そいつの末期(まつご)の言葉は決して口外しないように」

「了解しました。敵将は死の間際（まぎわ）まで無口な男であったと記憶します」

「それでいいわ」

副官が首を掲げて勝鬨（かちどき）を上げた。

ナトラ兵が雄叫びで応え、残るマーデン兵から戦意が失われていく。

それを見届けながら、二二ムは岩山の陰に目を向けた。

そこにいたのはウルギオたちを見事に釣りだした本営の兵士たちであり――その中心に立つ少年に向かって、二二ムは大きく手を振った。

「殿下、上手く行ったようです」

「みたいだな」

蜘蛛（くも）の子のように離散するマーデン兵。指揮官を失った彼らにもう抗（あらが）う力はないだろう。

奇襲用に準備していた伏兵とはいえ、まさか見事に敵の大将を釣りだして討ち取れるとは、ウェインも予想外だった。

「この戦、ほぼ決したか？」

問いにハガルは頷（うなず）いた。

「敵将を討ち取ったのは丘の裏ですから、丘の向こうで戦っている本隊にはまだ届いていません。なので素早く我らの無事と将の戦死を触れ回る必要がありますが、それさえこなせばマーデン軍は

撤退するでしょう」

「解った。ではそうするとしよう」

「はっ」

ハガルの指示で部隊は動きだす。

この後、ウェインたちは二二ム率いる部隊と合流して丘の上に戻った。

丘の裏に消えた総大将の帰還と敵将討伐(とうばつ)の報(しら)せにナトラ兵は大きく勢いづき、逆にマーデン兵の士気は底へと転じた。

加えてウルギオと共に指揮官も多く討ち取られていたため、彼らを纏める力を持つ者はおらず、マーデン軍はそのまま潰走(かいそう)することとなる。

かくしてポルタ荒原で始まった両軍の戦いは、僅か一日でナトラ側が圧勝するという形で決着を得る。参戦したナトラの兵は誰もが勝利に沸(わ)き、栄光という名の美酒に酔った。

だが、ただ一人。

（どーしたもんかなぁぁぁぁ……）

ウェインだけは、これから先に起こる展開を思い、一人暗澹(あんたん)たる気持ちを抱えていた。

第三章　過ぎたるはなお

「はああああああああああ……」

机に突っ伏しながら、ウェインは亡者の吐息のごとく陰鬱な気を吐いていた。

傍らに立つのはニニムだ。戦場と違い、その身に具足は纏っていない。

普段ならばウェインの気力が足りていない時は、ニニムがあの手この手で奮起させようとするのだが、今日は事情が違った。

「……困ったことになったわね」

眉根（まゆね）を寄せているのはウェインだけではなく、ニニムもだった。

「出発前にウェインが言っていたこと、ようやく理解したわ」

なんか言ったっけ、という顔をするウェインに、ニニムは先日のことを思い出しながら告げた。

「勝ちすぎるとよくない、ってやつよ」

◆◇◆

「速（すみ）やかに逆侵攻を仕掛けるべきです！」

発せられた指揮官の言葉は、およそここにいる

大半の人間が思い描いたものだった。

「侵攻してきたマーデン軍を打ち破った今、マーデン東部は完全な無防備！　今ならばマーデンの領土を大いに切り取れます！」

ポルタ荒原（こうげん）の戦いが決着したその夜。

今後の方針を決める軍議において、各指揮官たちは大いに気を吐いていた。

「同感だ。兵たちの被害は少なく、短期で決着したゆえに物資の消費も少ない」

「マーデンの連中が置いて行った糧食も回収したからな。喰（く）いすぎて兵たちの腹が破裂してしまうかもしれん」

軍議の場に笑い声が満ちる。

彼らの間にあるのが先の快勝からくる余裕なのは間違いない。

浮かれている、と断じるのは容易いが、致し方ない側面もある。国内の日陰者だった十数年。ようやく勝利と栄光という名の光を浴びることが叶ったのだ。彼らも人の子である以上、喜びに打ち震えるのは当然だろう。

さらにいえば今回の戦が防衛戦ということもある。戦とは領土を取ってこそ利益を得られ、防衛においてはあまり旨味がない。実利の面でも踏み込みたいという思いはあるのだろう。

が、

（冗談じゃねえ！）

上座に座るウェインは、場の空気と正反対の心境にあった。

（予定のない行軍計画を立てるのがどんだけリスク高いと思ってんだ！）

ポルタ荒原はナトラ王国の領内であり、地形の詳細な地図もある。どの道がどこに繋がっているか、川や山の配置、地面の傾斜、村や町がどこにあるかなど、事前に知ることができる。それによってスムーズな進軍や補給が可能になるのだ。

しかしマーデン国内になれば話は変わる。簡易

な地図こそあるものの、精度は自国のものと雲泥の差だ。あるはずの村がない、調べた時より川のカサが増えて渡れない、記されていた道が潰(つぶ)れている――そんなことがザラであり、また身軽な一人旅ならばどうとでもできることでも、数千人の集まりとなれば、方向転換の一つだけでも時間と労力がかかる。

そうしてモタついていれば、いつの間にか兵の士気も下がり、補給も滞って物資も減り、マーデン側も兵を改めて用意してくるだろう。それぐらい危険なことだ。

（でも、そう言えないんだよなあああああ！）

これが痛み分けの勝利だったのならば、ウェインの指摘に多くの将が頷いたはずだ。

だが今の空気で口にすれば、将たちの目にはいかにもウェインが弱腰で、戦を知らない凡百であるように映る。彼らの忠誠心が雪崩のように落ちていくのは間違いなく、行き着く先はクーデターだ。

（どうにか俺以外の誰かに止めてもらうしかない……！）

苦し紛れの作戦だが、二ムは使えない。今もウェインの一歩後ろで控えているものの、その立場はウェインの補佐官だ。部隊を指揮していたのはあくまで一時的なものであり、既に指揮権を返

上している。この場において発言権はない。

となると候補は一つしかない。ウェインは少し離れた席に座るラークルムに視線を向けた。

（ラークルム！　おい、ラークルム！）

視線に気づいたラークルムが何事かとウェインを見る。

（今の軍議の流れはまずい。お前が横やり入れてどうにか冷静にさせろ！）

（……なるほど。殿下（でんか）の意図、しかと伝わりました）

視線だけでやり取りしていたところに、折よくラークルムに水が向けられた。

「ラークルム殿、貴殿（きでん）はどう思われる？」

（頼むぞラークルム！）
（お任せください）
ラークルムは小さく頷き、言った。
「無論、一気呵成に攻め込む他にあるまい！」
（違っげ――よバカ！）
ウェインは内心でラークルムを張り倒した。
（なんで後押ししてるんだよ！　やりましたぞ殿
下みたいな笑顔向けてくるんじゃねえ給料減らす
ぞこの草食獣野郎！）
もはや議場は侵攻一色だ。ここから自分が異を
唱えたところで覆すことはできないだろう。
そう、異を唱えるのではダメだ。しかし違う方

向からアプローチはできる。

（できれば使いたくなかったが、もう四の五の言ってられん！）

ウェインは決意と共に口を開いた。

「――諸君の意見は解った」

その場にいる全員の動きが止まった。

高揚していた室内の空気が一転して静まり返り、あらゆる視線がウェインに向かう。

「ハガル」

ウェインは隣の席で黙然としているハガルの名を呼んだ。

「大勝した今、我らに大きな流れがあるという皆

の主張は理解できる。しかし、予定のない行軍でどれほどの負荷が軍にかかるのか、経験がない俺には正しく計(はか)れん。意見を聞きたい」

「はっ……」

老人は恭(うやうや)しく頷(うなず)いた。

「我が軍の勢いは長くは続きません。勝利の余韻(よいん)が晴れた後、兵士には強い疲労が圧(お)し掛かるでしょう。その時、帰路についていれば気力で移動することはできましょうが、終わりの見えない侵攻の只中(ただなか)では、必ずや彼らは膝(ひざ)を突きます」

「むっ……」

「ぬう……」

指揮官たちが一様に渋い顔をする。水を差されたのだから当然だ。しかしこの場で最も戦場の経験を積んできたハガルの言葉は、そう軽々(けいけい)と否定(ひてい)することはできない。

（ここまでは予想通り――！）

手ごたえを感じつつも問いを重ねる。

「では、撤退すべきだと思うのか？」

そうだと言ってくれれば楽になるが、恐らくはそうはならない。

ウェインの予想通り、老人は頭を振った。

「今が好機であることは間違いなく、みすみす逃すのも愚(おろ)かかと。……必要なのは、漫然(まんぜん)と侵攻す

ることではなく、兵士の気力と体力を見切り、明確に狙(ねら)いを絞ることです」

「……皆に異論はあるか？」

ウェインの呼びかけに居合わせた指揮官たちは沈黙で応(こた)えた。

「結構。それならばハガルの意見を踏まえた上で、一つ俺から提案がある」

皆の前に置かれた近隣の地図をウェインは睨(にら)む。

「知っての通り、この地域は恵まれた土地ではない。それはナトラ領だけではなく、マーデン領も同じだ。マーデン東部で戦略的な要所は多くない。そして我が軍の体力を踏まえ、到達可能な地点にあり、

かつ攻め落とす意味がある場所となると――」

ウェインは地図の一か所を指示した。

そこはマーデン東部の山岳地帯。少し前までは何の価値もなく、しかし今は最重要拠点の一つ。

「――ジラート金鉱山。狙うのだとしたら、ここしかないだろう」

ざわめきが指揮官たちの間に広がった。ウェインを前にして隠しきれない困惑がそこにはある。

一変した空気に、ウェインは内心で会心（かいしん）の笑みを浮かべる。

（そうだろう、そういう反応だよな。――どう考えても金鉱山は無理筋！）

ジラート金鉱山は現在のマーデンの要所も要所。下手すれば王都よりも重要だ。詳しくは調べていないが、防備が堅牢（けんろう）であることに疑いの余地はない。

そんなろくな調査も行われていない場所に、戦の疲労を残したまま攻め入る。いくら戦略的価値があるとはいえ、無理無駄無謀ここに極（きわ）まるというものだ。もちろんウェインはそのことを解っている。

ではなぜ提案したのかといえば、指揮官たちにこの進軍の意味が薄いと思わせるためだ。

指揮官たちはこう考えるだろう。金鉱山は無理だ。攻めるなら別のところしかない。だがどこを攻め

る？　金鉱山と同じぐらい価値のある場所が東部にあるか？

無い。無いのだ。東部に金鉱山以上に重要な拠点は無い。そうなると途端、他の候補が見劣りするように感じる。小さな砦（とりで）や村など占拠したところで、金鉱山に比べればどれほど無価値か。それを意識した時、指揮官たちのテンションが下がるのは自明（めい）の理（り）だ。

（無理筋を提案した俺の評価が多少下がるだろうけど許容範囲！　これで撤収に持ち込めると思えば安上がりってもんだ）

我が策（さく）成（な）れり。ウェインは内心でガッツポーズ

を取った。

「……殿下」

指揮官の一人が固い面持ちで口を開いた。恐らくどうやってウェインの提案が無茶であると納得させるか頭をフル回転させていることだろう。指揮官のメンツを潰さないよう、いかにも忠臣の諫言に心を打たれたかのような態度を取るべく、ウェインは気持ちを整えて――

「御慧眼、誠に感服いたしました」

「え？」

全く想像の範囲外の言葉に、目を瞬かせた。

「ジラート金鉱山……まさしく殿下の仰る通り、

狙うのならばここしかありませんな」
「いやあ驚き申した。――まさか、我らが以前より密(ひそ)かにジラート金鉱山奪取計画を練っていたことを殿下がご存知だったとは！」
「え？」
「最新の調査では鉱山の陣地は脆弱(ぜいじゃく)で、詰めている兵士は千に満たぬとのこと。進軍経路も十分に検証してあります」
「戦に絶対はありませぬが、挑むに値しますな」
「我らが勝利で浮かれている間に、殿下は奪取計画の実施の可能性に思慮(しりょ)を巡らせていたとは。臣として恥じ入るばかりです」

「それでは殿下、早速進軍の下知を！」
「このままジラート金鉱山に攻め入りましょう！」
「殿下！」「殿下！」殿下！」
「……」
ウェインはひきつった笑みを浮かべながら、傍らに立つニニムをそっと見た。
（……ニニム、ヘルプ）
ニニムはしっとりと微笑（ほほえ）んだ。
（ごめん無理）
かくして、ナトラ王国軍によるマーデン侵攻が決定した。

◆◇◆

「ほどほどの勝利だったなら、ストップかけられたんだけどなぁ……」

ぐんにょりと呻くウェインにニムは申し訳なさそうに言う。

「あるいは、敵将を捕縛できていれば速やかに戦後交渉を始めて、和睦に持ち込めたかもしれないわね。……ごめんなさい、ウェイン」

「降伏勧告をして無視されたんだろ？　そりゃ仕方ないさ、気にすることじゃない」

「……そうね」

「問題はこの後だ。まずは金鉱山の守備状況が欺瞞（まん）じゃないか再確認して」

「補給線を見直して、兵の士気を可能なだけ高めに維持し続けて」

「マーデン側が対処する前に、金鉱山を奪い取る」

口にするのは容易（たやす）いが、どれほど難しいことか。

たとえ事前に計画を練っているとはいえ、連戦だ。

必ずどこかで躓（つまず）く。だが躓けば、それを理由に撤退に現実味を与えられる。

そうウェインは考えていたし、ニニムもそうなるだろうと思っていた。

――だが。

「取っちゃったんだよなぁ」
「取っちゃったのよねぇ」
二人は揃(そろ)って、部屋の窓枠から外を見る。
見えるのは、星の浮かぶ夜空の中で、天を貫くようにそびえる巨影。
影の名はジラート金鉱山。マーデン国の金脈であり、今日、ナトラ王国軍によって占拠された鉱山だった。
二人がいる場所は、鉱山の麓(ふもと)にある屋敷の一室なのである。
「……まさかここの守備兵があんなに弱いとは」
「びっくりするぐらい弱兵だったわよね……軽く

一当てしただけで逃げちゃったし」
「大方、ここを管理してた人間が予算を中抜きしてたんだろうな。マーデン王もきちんと監視しとけよ……」
「言っても仕方ないわよ。それより、どうするかを考えないと」
「そうなんだよなぁ……」
予想外で、かつ特大の問題に、ウェインとニニムは揃って唸(うな)り声をあげた。

◆
◇
◆

マーデン国のエリスローン宮殿といえば、マーデンの成金（なりきん）ぶりを象徴する建築物である。

金鉱山の収入に気をよくした今代のマーデン国王、フシュターレ王の指揮によって着工され、高名な技師、高価な資材、潤沢な資金が惜しげもなく用いられた。出来上がるのは歴史に残る素晴らしい宮殿になると、関係者の誰もが思っていただろう。

しかし残念ながら、一流の人間と資材と資金が集められたこの場所には、三流の国王というどうしようもない異物が混ざっていたのである。

人間誰（だれ）しも取り柄があるという。フシュターレ

国王の取り柄が何なのかは不明だが、少なくとも芸術方面でないことはこの件で証明された。王という絶対的な権力を持つ彼は、使い古された硬貨よりも薄い知識と偏狭な美意識をこれでもかと設計図に盛り込み、鼻を高くしながら職人たちに突きつけたという。

およそ児戯（じぎ）に等しい設計図を、王の機嫌を損ねないようあらゆる技巧と言い訳を駆使して見れる形に直した職人はさすがの一言だ。彼らにとって全く名誉ではない形ではあるものの、その腕前が本物であることは内外に示された。

しかしいかに名工であっても限界はある。人が

行き来しにくい途切れ途切れの導線、内装デザインの不一致、飾られる調度品の統一性のなさ――芸術美としても機能美としても三流の建物であることは、少し目端（めはし）の利（き）く者ならば明らかだった。

唯一の救いといえば、フシュターレ王が少しの目端すら持たない人物であることと、宮殿に仕える人々がそれを指摘しないだけの分別（ふんべつ）を持っていたことだろう。かくして裸の王様は、自らが造った完璧（かんぺき）な宮殿の玉座にふんぞり返ってご機嫌でいられるわけである。

しかしそんなある意味平和な光景は、ここ数日の宮殿からは消え去っていた。

「なんたることだ、なんたる……」

無意味に長いことで知られるエリスロー宮殿の西回廊を、壮年の男性が速足で進んでいた。

丸い。とにかく丸い。足が短ければ腕も短く、その上で胴体と顔立ちが丸みを帯びていて、蹴り飛ばせばさぞ綺麗（きれい）に転がることだろうと思わせる体型だ。

彼の名はジーヴァ。マーデン国の外交官の一人だ、今や王宮でも少数派となった、生（は）え抜（ぬ）きの臣下でもある。

「早く、一刻も早く……！」

青ざめた表情で何度も呟（つぶや）くジーヴァは、やがて

広間に到着する。そこは壁の隅から柱の陰まで意匠を凝らした、エリスロー宮殿においても一際贅沢に造られた場所であり、フシュターレ国王のお気に入りの場所だ。

ゆえに最近の御前会議は専らここで行われており、今日の臨時会議も同様だった。

「これは一体どういうことだ！」

広間についた途端響いたのは、身が竦むような怒声だった。

「ジラート金鉱山が、よりにもよってナトラの羽虫共に奪われただと!?」

広間の中心に据えられた長卓。マーデンの重臣

たちが居並ぶ中で、顔を赤黒く染(そ)めながらあらん限りの罵声(ばせい)を口にするその人物こそ、国王フシュターレだ、

フシュターレは見事なまでの肥満体だ。ジーヴァの体型は家系からくる生来のものだが、彼の節制という言葉を己(おのれ)の辞書から消した結果である。

今の彼にとってみれば、目に映る全(すべ)てが怒りの対象だろう。ジーヴァはその身に似合わぬ機敏さで柱の影を進み、長卓の席についている一人の背後で跪(ひざまず)いた。

（ミダン様、遅れました……！）

ミダンと呼ばれたその老人は、マーデン王国の

外務大臣。すなわちジーヴァの上司だ。

（この状況で遅参（ちさん）とは、どこで道草を食っていたジーヴァ）

（申し訳ございません。大使との会談が長引いてしまい）

（ふん、話は聞いているな？）

（はっ……）

（ならばよい。今は下がっていろ）

ミダンに命じられ、ジーヴァは一礼して広間の隅に寄った。

奇（く）しくもその時、広間にフシュターレのそれとは違う声が響いた。

「王よ、お怒りはごもっともでございます」
フシュターレ王に近い席に座る男の名はホロヌイエ。
猫背でやせ細り、歪(ゆが)んだ笑みを湛(たた)える不気味な姿からは想像もつかないが、マーデン国の財務大臣である。
（チッ、佞臣(ねいしん)め……）
ジーヴァは内心で舌打ちをする。不愉快な思いをしているのは何もジーヴァに限った話ではなく、あの男が喋(しゃべ)り始めると同時に、居合わせる人間の大半が顔を歪めている。
「しかしこのままでは事態は悪化するばかり……

速やかに対策を講じなくてはなりませぬ」

「随分と身勝手ですな」

口を開いたのはミダンだった。

「ホロヌィエ殿、金鉱山については守備兵の差配も含めて貴殿に一任していたはず。我が国の最重要拠点ともいえるあの場所を易々と奪われておいてその言い草……自らの責任を有耶無耶にするつもりか？」

ミダンの眼光は若輩ならば竦み上がるほどの威圧を持つ。安易な言い逃れは決して許さないという意思が感じられる。

だが、受けるホロヌィエもさるもの、一切動じ

ることなく答えた。

「易々というのは間違いですなぁ、ミダン殿。報告では守備兵の誰もがナトラ兵に果敢に応戦し、その職務を全うしたとあります」

「ならばなぜ奪われた」

「それはもちろん、ポルタ荒原での敗戦が原因でしょう」

にい、と不気味な笑みをホロヌィエは浮かべた。

「ええ、ええ、あの戦いでウルギオ将軍がああも簡単に討ち取られていなければ、結果は違っていましたとも」

ホロヌィエは一転してとぼけた表情になる。

「そういえば、軍の指揮を誰に任せるかの選定でウルギオ将軍を推したのは、生粋（マーディア）の方々でしたなぁ。まったく、実のない人間ほど他人の足を引っ張りたがる。ミダン殿もそう思いませんか？」

「貴様……」

現在マーデンに仕える臣下たちは、大別して二つの派閥に分かれている。

その一つはジーヴァも属する生粋（マーディア）派だ。マーデンに生まれ、マーデンで育ち、そしてマーデンに仕えることを選んだ生粋のマーデン人による派閥である。派閥内に軋轢（あつれき）もあるにはあるが、全体としてマーデンへの忠誠心は高い。

対してもう一つが外来派（ステラ）である。外国出身でありながら、その高い能力を見込まれて要職に就くことを許された者たちの派閥だ。全体として国家への忠誠心は薄く、彼らを国に繋ぎとめているのは高い俸禄（ほうろく）である。

この両派閥の対立が激しくなったのは、ここ数年のことである、というのも、それ以上前になると外来派（ステラ）の数が少なすぎて、派閥として成立していなかったからだ。

ではなぜ外来派（ステラ）が急進したのかといえば――そう、金鉱山の発見によるものだ。

鉱山が発見された当初、王宮は上を下への大騒

ぎだった。なにせマーデンはしがない貧国だ。少ない資金をやりくりすることには慣れていても、降って湧いた幸運の女神の扱いなど、誰一人として心得ていない。

そんな時に目ざとく現れたのが、ホロヌィエを筆頭とした外国人の官僚である。彼らは他国で多くの政務を取り仕切った実績を手土産に、我らならばこの幸運を正しく扱える、とフシュターレ王国に取り入った。海千山千の政治闘争に明け暮れた経験を持つ彼らにとって、浮足立った田舎の王を丸め込むことなど容易いことだった。

彼らは次々と王に登用され、その能力をいかん

なく発揮した。彼らの的確な差配によって生まれた金鉱山の利益は莫大なもので、フシュターレは大いに気をよくし、さらに外国人を重用するようになった。

もちろん生粋派（マーディア）にとっては面白（おもしろ）くない。日々権威を増していく外来派（ステラ）への憎しみは高まるばかりだ。外来派（ステラ）にとっても、地元出身というだけで大きな顔をする生粋派（マーディア）は目障（めざわ）りで仕方ない。かくして両派閥の争いは、もはや誰にも止められない領域に至っていた。

「あの時、どうして生粋派（マーディア）の強行を許してしまったのか。ドラーウッド将軍にお任せしていれば、こうはならなかっ

たでしょうに。マーデン国を愛する忠臣として恥ずかしいばかりです」

「貴様が忠臣を気取るのか」

「もちろん、私以上にこの国と王を敬愛する者はいないと自負しておりますよ」

ナトラへの出兵が決まり、生粋派（マーディア）のウルギオと外来派（ステラ）のドラーウッドのどちらに軍を預けるかで両派は激しく対立し、最終的に生粋派（マーディア）がポストをもぎとったのだが、ここにきてそれが裏目に出ていた。

（馬鹿（ばか）げたことだ）

ジーヴァは内心で吐き捨てる。

彼は生粋派（マーディア）ではあるものの、政争とは距離を置いていた。派閥の利益のために国益を損なうことさえ厭（いと）わない両派には、心底嫌気がさしている。

「くだらぬ言い争いはもうよい！」

睨み合うホロヌィエとミダンの間を断ち切るように、フシュターレが再び声をあげた。

「おめおめと逃げ帰ってきた者どもは余（よ）が手ずから八つ裂きにする。だが、それよりも今は金鉱山だ。ホロヌィエ、策はあるのだろうな？」

「もちろんでございます。とはいえ、策を弄（ろう）するほどでもございません。敗戦はあくまでもウルギオ将軍の不覚によるもの。ならば次こそドラーウ

ッド将軍に任せれば良いだけのこと」

「待たれよ」

ミダンは即座に口を挟んだ。

「ナトラを侮(あなど)っていたウルギオ将軍の不覚は確かにあろう。しかし将を挿(す)げ替えればそれですむと考えるのは軽率ではないか。まして鉱山に籠(こ)もられれば、並大抵の兵力では」

「ならば、先の戦の三倍の兵を用意しましょう。それで押し潰せばいいだけのこと」

「馬鹿な、それほどの兵を動かせば国境の守りが疎(おろそ)かになる！　隣国のカバリヌがこちらを狙っているのを知らぬわけではあるまい！」

「だからこそ、ですよ。あの金鉱山は我が国の要(かなめ)。取り戻すのに時間をかけていれば国力は落ち込み、カバリヌなどから狙われやすくなります。周辺国が挙兵する前に、迅速に、一気呵成に奪取するしかないのです。……それとも、ミダン殿は他に策が？」

値踏みするように目元を歪めるホロヌィエ。

ミダンは視線を切り、フシュターレに進言した。

「陛下、ここはナトラ側と話し合いの場を持つべきかと存じます」

「……なにゆえ余の国を侵した慮外者(りょがいもの)と席を同じくしろと？」

フシュターレの顔が険しくなる。しかしミダン

は怯(ひる)まず続けた。

「まず、大兵力を用意するのだけでも時間がかかります。次にそれだけの兵を用意しても、すぐさま奪還できるか不明です。ナトラ軍に粘られ長期化すれば、多くの物資を消費し、隣国に隙(すき)を見せることになるでしょう。ならば、ナトラと交渉し鉱山の引き渡しを要求する方が早く、安全であるかと……」

「それこそ馬鹿な、でしょう」

ホロヌィエは嘲(あざけ)るように言った。

「あの鉱山の価値を知っていれば手放すはずがない」

「……金鉱山を持つとなれば諸外国から狙われる

上に、その扱いは小国にいる人材の手に余る。それは貴様も知るところだろう？」

「む……」

ホロヌィエは僅(わず)かに言(い)い淀(よど)んだが、すぐさま頭を振った。

「しかし応じたとしても相当の資金を要求されるはずですよ？」

「だが、交渉の余地はあるはずだ。……陛下、どうか私にナトラとの交渉をお任せください」

二人の臣下の提言を受け、フシュターレは瞼(まぶた)を閉じて思案の顔になった。

次にその瞼が開いた時、視線の先に立っていた

のはホロヌィエだった。

「……ホロヌィエ、ドラーウッド将軍を呼べ。奪還のための兵を興(おこ)す」

「ははっ」

「陛下……！」

食い下がろうとするミダンに、フシュターレは告げた。

「そこまで言うのならば奴(やつ)らとの交渉を許す、やってみせよ。……兵が集まるまでの間に、余が満足する結果を出せるというのならば、な」

「……ははっ！」

そしてしばらく詳細を詰める議論が交わされた

後、御前会議は終了となった。

家臣たちが次々と広間から退出する中で、ミダンの傍（そば）にジーヴァは跪く。

「話は聞いていたな、ジーヴァ」

「はっ」

「今すぐ情報を集め、金鉱山へ向かえ。何としても金鉱山の引き渡しを成立させろ。これ以上外来派（ステラ）に手柄を奪われるようなことは避けねばならん」

「……」

「ジーヴァ？」

「……はっ。承（うけたまわ）りました」

思うところはあるがこれも仕事だ。それに大兵力を興すことのリスクについてはジーヴァとしても同意する。

（だが、短期間でどれだけできるか……）

胸の中で不安が膨らむのを自覚しながらも、ジーヴァは行動を開始した。

◆◇◆

ニニム・ラーレイの朝は早い。

彼女が目を覚ますのは、決まってまだ夜明け前の時間帯である。

なにせ明かりが貴重な時代だ。さらに今は場所が遠征先ということもあり、油や蠟（ろう）の浪費を避けねばならない。となれば、日の出と共に仕事を始めるのが最適解になる。

そして起きたニニムが真っ先に行うことは、浴室にて身を清めることだ。

「……ふう」

ナトラ軍がジラート金鉱山を占拠してから一週間。かつて鉱山の管理者が利用し、今は臨時の本営となっているこの館の構造にも慣れ、業務の滞りも減少してきた。おかげでこうして水を浴びる時間も取れるようになっている。

もっとも、遠征先なので本当に浴びる程度だ。溢(あふ)れんばかりのお湯に浸かったり、香油を垂らして肌に香りを染みこませることはさすがにできない。時折、女としての思いが湧き上がって今以上の贅沢(ぜいたく)を望みそうになるが、そこは補佐官としての理性で押しとどめている。

（さて、そろそろ起こしにいかなきゃいけないわね）

ニニムは湯船から出ると、水気を拭(ぬぐ)い身支度を整えた。

そして廊下を進み、目指す先はウェインの寝室だ。

「補佐官殿。今日もお早いですね」

扉の前には警備の兵が二人立っていた。

「私が寝坊などをすれば、その分殿下のお目覚めも遅れますからね。警備中、不審なことなどはありませんでしたか？」

「何もありません。静かなものでした」

「結構。それでは」

兵が扉の前から離れ、ニームはウェインの寝室に踏み入った。

部屋の中は簡素なものだ。なにせ館を接収したその日のうちに、金になりそうなものも根こそぎ回収したからだ。とはいえ元の主（あるじ）が逃げ出す時に多くを持っていったようで、大したものはなかったが。

しかし物に限定しないのならば、今この部屋にはナトラ王国で二番目に大事なものがある。ベッドで眠るウェイン・サレマ・アルバレストだ。

「……ウェイン」

彼の耳元に顔を寄せ、小さく囁（ささや）く。

ウェインは起きない。知っている。彼は寝ることが好きだが起きることは好きではない。放っておけば太陽が中天に輝くまで眠りこけているだろう。

それを防ぐには、窓のカーテンを開いて部屋に光を取り入れ、彼の耳元で元気よく朝の到来を告げるしかない。そうすれば彼は気だるげに毛布の中から這（は）い出（だ）して来る。

しかしニニムはすぐにはそうしなかった。ウェインの枕元（まくらもと）に頬杖（ほおづえ）をつき、眠る彼の横顔をジッと見つめる。

眠るウェインの横でしばし時を過ごすこと。ニニムがたまに行う、特別な贅沢だ。

「んー……むにゃ」

ウェインの喉（のど）から声が僅かに零（こぼ）れ落ちる。何か夢でも見ているのだろうか。表情の柔らかさから、悪夢ということではなさそうだ。

（もしかしたら、私の夢、とか）

そんなことは知る由（よし）もないけれど、そうなら少しだけ嬉（うれ）しい。

（今日の朝食は、ウェインの好きなもので作ろうかしら）

王宮での食事は専任の料理人がいるが、この遠征先でのウェインの食事はニニムが采配（さいはい）している。ニニムの腕前的にも使用できる食材的にも王宮で出されるそれより劣るが、王太子の口に入るものだ。それなりに手の込んだ料理を用意している。

上機嫌になりながらそんなことを考えていると、ウェインは緩（ゆる）んだ顔で寝言を口にした。

「おっぱい……大きい……ふかふか……」

「……」

ニニムは自分の胸部をぺたぺたと触った。

お世辞にもふかふかではなかった。

朝食はウェインの苦手なものフルコースで行くと心に決めた。

それから二二ムは、憤然（ふんぜん）とした気持ちを晴らすように彼の横顔を覗（のぞ）き見る。

（……心なしか前より男らしい顔立ちになってるような）

ウェインの前髪を指先でいじりながら思う。

（身長もまだ伸びてるのよね。小さい頃は私と同じくらいだったのに、いつの間にか抜かれて、体格もしっかりしてきて）

逆に自分の身長は打ち止めの気配が濃厚だ。顔

つきや体格も丸みを帯びて女性らしくなった。なお、胸部については触れないことにする。

だというのにウェインといえば、不意に肩を掴(つか)んで抱き寄せてきたり、惜しげもなく上半身を晒(さら)してみせたり、胸がどうのこうの言ってきたりと、性差など気にせず子供の頃(ころ)と変わらない距離感でいる。

それが嬉しいと思う気持ちもあれば、もやもやする気持ちもあり、何よりそういうことをされる度に、平静を取り繕いつつも心臓の鼓動が早くなる。

果たして彼はそのことに気づいているのだろうか。気づいていない気がする。でも気づいていて

わざとやってる気もする。この野郎、という思いが高まり、顔に落書きでもしてやろうかと一瞬考えたが、すぐさま頭を振った。

（……そろそろ起こさなきゃいけないわね）

ニニムは静かにウェインから距離を取り、さも今しがた部屋に入ったかのような足取りで窓のカーテンを引いた。

部屋に夜明けの光が差し込む。

光の気配を感じたウェインが小さく身じろぎをする。

「ウェイン、起きて。朝よ」

夜と朝の間にある、彼を独り占めにできるひと

時に、ニニムは自ら終わりを告げた。

◆◇◆

「――こうなったら、鉱山をとことん利用しよう」

執務室の窓の外から見える鉱山を眺めながら、ウェインは自らの結論を口にした。

「いいの？　間違いなくマーデンともう一度戦争よ？」

懸念（けねん）を示すのは傍（かたわ）らのニニムだ。

鉱山の稼働自体は可能だ。鉱山には鉱夫やその家族が住んでおり、占拠して当初は色々と混乱が

あったが、今は周辺も含めて落ち着きを取り戻しつつある。彼らの協力を取り付け、仕事をさせることは難しくないだろう。

しかし当然、マーデン側は準備が出来次第取り返しに来るだろう。ここの金鉱山にはそれだけの価値がある。国力が上回るマーデンが本腰を入れれば、どれほどの被害が出ることか。

だがウェインとしても、それらを加味した上での結論だ。

「取っちゃったものは仕方ない。今更破棄なんてすれば軍どころか国の士気にも関(かか)わる」

となればニニムに異があるはずもない。

「それなら問題は、マーデンからどうやって守り抜くかね」

「まずは周辺地理の把握だな。簡単には調べたけど、まだ足りない。それに鉱山の内情もだ」

「仕方ないことだけど、資料のほとんどが入手できなかったのが痛いわね」

鉱山の守備兵はすぐさま退却したが、その際に鉱山に関する資料などは多くが焼き捨てられ、あるいは持ち去られていた。陥落しそうになればそうしろと、事前に取り決めていたのだろう。

「失礼します」

不意に扉が叩(たた)かれた。現れたのはラークルムだ。

「殿下、各種調査の進捗(しんちょく)についてご報告に参りました」

「ご苦労。順に始めてくれ」

「はっ。まずは鉱山の住民ですが、概(おおむ)ね我々に対して好意的です。殿下のご指示通り、食料の配給や住居の建設に協力したのが功を奏したと思われます」

「我が軍が到着する前の彼らの扱いを思えば、無理もありませんね」

ラークルムが現れたことで、口調を改めつつニムは言う。

守備兵を蹴散らしたナトラ軍は、そのまま鉱山

の制圧に乗り出した。

当然その中には鉱夫やその家族の居る居住区も含まれており――そこで目にしたのは、ぼろ小屋に押し込まれやせ衰えた人々の姿だった。

彼らは安価で買われた奴隷（どれい）であったり、あるいはマーデンにて罪を犯し、苦役（くえき）としてここに送られた者たちだ。中には罪を犯してないにも拘（かか）わらず、権力者の都合によってここに送られた者もいる。

鉱山労働は過酷の極みにあり、ろくな食事も与えられず、医者などは以（もっ）ての外（ほか）。住居も廃材をかき集めたような有様（ありさま）で、大半の人間が数年と持たずに死に至る有様だという。

そんな彼らの窮状を知ったウェインが行ったのが、食事の配給と、手すきの兵を駆り出しての簡易住居の建設である。これには鉱山の住人はこぞって感謝を表した。

もちろんここにはウェインの打算がある。物資の消耗は増えたが、鉱山の運用を速やかに再開するためにも住民の協力は必須だ。マーデンとのぶつかり合いが控えている中で、足元に火種（ひだね）を燻（くすぶ）らせるのも良くない。

（それに、あんな非効率的な働かせ方してたら勿体（もったい）ないしな）

人が死ぬということは、単純な労働力以外にも

その人の持つ知識や経験も失われるということだ。鉱夫だからと軽々(けいけい)に死なせていては、逆に採掘が滞(とどこお)る。

「地図の作製はどうだ？」

「鉱山周辺については一両日中に完成するかと。ですが鉱山内部については、坑道が多岐(たき)にわたり、把握には今しばらく時間がかかります。鉱夫からも聞き取りを行っているのですが、入れ替わりが激しく全容を知る者はなかなか……」

「解った、そのまま進めるように。報告はそれだけだな？」

「はっ……ですが一つ、別件が」

「なんだ？」
「鉱山の住民の一人が、殿下に面会を求めています」
ウェインは小首を傾げた。
「陳情についてならお前に一任したはずだが」
「私もそう告げたのですが、どうしても殿下直々にと。調べたところ、住民の纏め役の一人のようですが」
ウェインとニニムは目を見合わせた。
「どう思う？」
「何か企みを感じますね。会ってみるのも一興かと」
「だな。ラークルム、呼んで来い」
「はっ！」

ラークルムは一旦部屋から下がり、程なくして彼と一緒に現れたのは一人の男だ。

全身に倦怠感を纏うやつれた男だ。ここの住民ならば大半が痩せこけているが、彼の場合は一層酷い。少し小突いただけでも倒れそうである。

（……）

が、跪くその男を見てウェインが考えたのは全く別の事だった。

「……お初にお目にかかります、ウェイン摂政殿下。私は」

「ペリント」

ウェインが口にした名前に、男はハッと顔を上

げた。

「以前、マーデンの高官を調べた時に人相書きを見た。だいぶ雰囲気は変わっているが、その様子だと合っていたようだな」

「……噂(うわさ)に違わぬ見識。恐れ入りました」

ペリントは再び頭(こうべ)を垂(た)れた。

「殿下の仰る通り、私はペリントと申します。数年前まで、マーデンの王宮に仕えておりました」

「政争に敗れたか」

「重ね重ね、御明察の通りでございます。財産も全て奪われ、ここに押し込まれました」

「ならば要件は、我が国にて再起を望むというも

のか？」

よくある話だ。そう思いながら口にした言葉だったが、しかしペリントは予想外にも頭を振った。

「望む気持ちはございますが、此度（こたび）は別の願いのために参りました。そのための手土産も用意しております。……どうぞこちらを」

ペリントが取りだしたのは古びた巻物だ。

ニニムを経由してウェインが受け取り、中を確認する。その瞳（ひとみ）が驚きに揺れた。

「これは……鉱山内部の地図か！」

「はい。全ての坑道を記した完全なものでございます」

今のウェインにとって喉(のど)から手が出るほど欲しいものだ。確認の必要はあるが、これがあるかないかで今後の作業の捗(はかど)り具合が大きく変わるだろう。

「どうしてこれを？」

「摂政殿下が必要とされるだろうと考え、焼かれる前に盗み出しました」

「……なるほど、確かにこれには値千金(あたいせんきん)の価値がある」

だがそれゆえに、ウェインは気を引き締める。

この地図を代償とした願いはいかなるものか。

「言ってみろ、ペリント。何を望む」

「はっ」

ペリントは臓腑（ぞうふ）に力を溜（た）め込（こ）むかのように大きく息を吸い、言った。

「――どうか、鉱山の民をお見捨てにならないで頂きたい」

「……なんだと？」

予想外の言葉にウェインは眉根（まゆね）を寄せる。

困惑は同席しているニニムとラークルムも同じだ。特にラークルムは不快そうに顔をしかめた。

「無礼だぞ、ペリントとやら。殿下がどれほどこの民に御心を砕かれているか、知らぬわけではあるまい。それを踏まえて見捨てるなとは、いかなる了見か」

「それゆえにでございます」

ラークルムの視線から逃れることなくペリントは続けた。

「恐れながら、殿下の御人徳を目にしなければ、私は口を閉ざし、地図の褒美として金子を頂戴して去っていたでしょう。ですがそうではなかった。ゆえにこれを秘することはできなかったのです」

そう言うとペリントは、今度は書類の束を取り出した。

「……それは何の書類だ？」

「私が密かに記録してきた、この鉱山の採掘情報でございます。どうぞご覧に」

不穏な空気を感じつつも再度ニニムを経由して書類を受け取り、視線を落とす。

ペリントが口にした通り、書類の中身は金鉱山から採掘した鉱物の記録だ。最初期からつけられているものらしく、ウェインは順に読み進め――直近の記録に差し掛かったところで、止まる。

「……おい、まさかこれは」

「はい。その数字が示す通りです」

ペリントは粛々（しゅくしゅく）と告げた。

「この金鉱山は、枯渇（こかつ）しかけているのです」

◆
◇
◆

ジラート金鉱山から程なく離れた場所に、小さな町がある。

これといった問題も産業も抱えていない物静かな町だが、今は違う。金鉱山を占拠したナトラ軍を警戒して近隣から兵士が集められ、物々しい雰囲気の只中にあった。伝っ手を持つ住民は既に遠方へ避難しているが、そうでない住民は息を潜めながら暮らしている。

そんな厳戒態勢にある場所に寄り付く旅人といえば、よほど酔狂か、特別な事情があってのことだろう。

閑古鳥（かんこどり）の鳴いている宿の一室を借りているジーヴァは、まさにその後者だった。

「――以上が、鉱山の住民についてのご報告になります」

「そうか、よくやってくれた」

部屋には二人の男がいた。片方はマーデン王国外交官のジーヴァだ。もう片方は、彼が個人的に雇っている密偵である。

ジーヴァはナトラ側と交渉するため密偵を放ち、同時に素早く交渉の席につけるよう、自らもこの町に乗り込んだのだ。そこで待つこと数日、帰還した密偵から報告を受け取ったのだが――その内容

は耳を疑うようなものだった。

「まさか、金鉱山の住民がそこまで酷(ひど)く扱われていたとは……」

部屋に備えつけてある、簡素な椅子(いす)の背もたれを軋(きし)ませながら、ジーヴァは深く項垂(うなだ)れる。

噂(うわさ)には聞いていた。人を人と思わず使い潰(つぶ)していると。だが鉱山の全権はホロヌィエに委任されており、そして確かな利益を出しているため、外来派(ステラ)は元より生粋派(マーディア)も深く追及できずにいた。

（……いや、そうではあるまい。恐らく生粋派(マーディア)の上層部も抱きこまれているのだ）

文字通りの金脈を押さえている上に大国の政争

の経験者。この件において生粋派（マーディア）を丸め込むことも難しくないだろう。そして上が沈黙してしまえば、ジーヴァのような下の者たちは何も言えない。無理にでも問題にしようとすれば――問題になる前に、そいつはいなくなるだろう。

「……ナトラが彼らを弾圧していないというのは、間違いないのだな？」

「はい。それどころか食料を配り、住居も建設しています。……恐れながら、鉱山の民の心は既にマーデンにないものかと」

「そうだろうな、そうだろうとも」

自分たちを奴隷のごとく扱ってきた国に忠義な

ど抱くはずもない。

彼らにしてみればマーデンは悪辣（あくらつ）なる支配者であり、ナトラはその解放者だろう。

「ナトラ王国の王太子……徳の高い少年だとは耳にしていたが、真実のようだ。軍としての動きはどうだ？」

「周辺の調査をして地理の把握に努めているようです。それにまだ手付（てつけ）の段階でしたが、防衛用の塁（るい）も作り始めています」

「……」

着々とナトラ側も防衛戦の準備をしているようだ。

これ以上悠長にはしていられない。ジーヴァは

決断を下した。

「行くしかあるまいな。使者として、話し合いの席に」

「ですが危険です。場合によっては殺されるやもしれません」

「その程度の危険を踏み越えなくては何も得られんさ。ここは王太子の仁徳に賭(か)けてみるとしよう」

固い決意と共に、ジーヴァは金鉱山へ向かうべく準備を始めた。

◆
◇
◆

一方その頃、敵国の外交官から心意気を評価されていたウェインは、

「ヴぁー……」

亡者のように呻きながら、机に突っ伏していた。

「……いつまでもダレてないで、そろそろ立ち直りなさいよ」

そう告げるニニムの言葉にも普段の力がない。

今回ばかりは彼女もウェインの気落ちに同調していた。

「……枯れかけだぜ枯れかけ。よりにもよって、金鉱山が。本国から遥々遠征して占拠して、マーデンと戦争をしてでも確保しようって決めた矢先

に、実は確保する価値がないときた。テンション下がるわぁー……」

あれからウェインたちはもたらされた資料の真偽を徹底的に調査した。

結果は真。現在採掘されている金脈が枯れかけていることはほぼ間違いなかった。ウェインの失意も当然だ。個人レベルで目算（もくさん）が外れたのならば笑い飛ばすこともできようが、国家戦略規模でハズレを引いたとなればそうもいかない。

「でも、何もせずにいるわけにもいかないでしょう」

ウェインへ向けると同時に、自らに対してもそうニニムは言い聞かせる。

「とにかくこれからの方針を決めないと」
「方針つっても、撤退しかないだろ」
机から僅かに顔をあげ、不機嫌そうにウェインは言った。
「攻めたのは、ここに価値があると見込んだから。占拠して守りを固めるのは、ここの価値を維持するために。でも実は価値がないとなれば？　早々に手を引くのが一番傷が浅い」
道理である。こうしている間にも、軍団の維持に費用がかさんでいる。まして敵地に食い込んでいるとなれば尋常ならざる出費だ。早期に撤退するのが最も利口だろう。

「撤退するならあの約束はどうするの？　ペリントが言ってた、鉱山の民を見捨てないっていう」

「民を見捨てるなとは言われたけど、鉱山を見捨てるなとは言われてないだろ。望む奴だけ連れて帰ればいいさ。ここにいたって未来はないし、元々ナトラ（うち）は多民族国家だ。マーデンの鉱山民が加わるぐらい何ともない」

「……妥当なところね」

頷き、ニニムは続けた。

「それじゃあ、すぐに住民に布告を出して撤退の準備に入るのでいいの？」

「……いや、まだだ」

「どうして？」

「絶対文句出るだろ、今撤退するなんて言っても」

遠征して切り取った領土を一方的に放棄するなど、軍部のみならず国のメンツにも関わる。せめて説得のためにも何かしら理由が欲しいところだ。

「軍に事実を伝えればいいんじゃない？　全員が不都合なら、指揮官にだけとか」

「指揮官に限定しても必ず兵士に漏れる。そして漏れたら士気はガタ落ちだし、下手すれば住民に暴行を働く連中も出てきかねない。可能なら伏せておきたい」

「となると……マーデンが軍を興すの待つわけね」

「ああ、鉱山を取り戻すためにマーデンは相当な大軍を引っ張ってくるはずだ。その兵力差が明確になれば、撤退にも納得してもらえる……はず」

いまいち煮え切らないのは、ここまで積み重なってきた予想外の出来事ゆえである。

「いっそのこと何も教えずに他国に売るのはどう？　カバリヌとか」

ペリント曰(いわ)く、この鉱山を任されていたのはホロヌィエという家臣だが、採掘された金の量は役人を経由するたび横領のために数字が改ざんされており、恐らくは彼も正確な全容を把握していないはずだという。

すなわち金鉱山の枯渇を知るのはペリントとあの場にいたウェインたちのみ。ならばそのまま隠ぺいして他国に売るというのは不可能ではないだろう――が。

「短期間に話を纏めるのは難しいし、長期的になるとマーデンとぶつからなくちゃならん。そうなると採算が微妙になるし、バレた時に絶対恨(うら)まれるのがな」

悩ましいところだ。せっかく取った場所を何もせず手放すのは惜しい。

どこかに売り先がないものかとウェインは思考を巡らせる。

その時、にわかに館の外から騒ぎ声が届いた。
「何かしら？」
ニニムと共に窓から外を覗(のぞ)き込むと、何やら外を慌ただしく兵が行き来している。もしや敵襲かと思ったところで、部屋のドアが叩(たた)かれた。
「殿下、失礼します！」
僅かに息を切らしながら現れたラークルムに、ウェインは即座に問いかけた。
「敵の攻撃か？」
「いえ、違います」
ならばなんだと視線で続きを促す。
「使者です。マーデンからの使者が今しがた到着

しました」

「――」

その時ウェインが目を見開いたのは、使者が到着したからではなかった。

脳裏（のうり）に浮かぶ、一つの閃（ひらめ）きによるものだ。

「殿下との会談を要求しています。如何（いかが）なさいますか？」

「……そいつは名乗ったか？　どんな身なりだった？」

「ジーヴァと名乗りました。そしてマーデンの外交官であると。立ち振る舞いからしても高位の官吏であるのは間違いないかと思われます」

「聞き覚えがあるな。ニームは？」
「ございます。そのような者がマーデンの宮中にいたはずです」
「よし、ラークルム、使者を応接間に案内しておけ。俺もすぐに向かう。くれぐれも失礼のないようにな」
「はっ！」
ラークルムは即座に踵（きびす）を返して部屋を出ていく。
「ニニム、供応の手配を頼む」
「解ったわ。すぐにすませ――」
言いかけた唇が止まる。理由は目の前の主（あるじ）の表情。
「どうしたのウェイン、変な顔して」
「いやなに、考えてみればここが完全にすっぽ抜

けてたと思ってな」

「……何の話？」

ウェインはにっと笑った。

「鉱山の売り先だ」

◆◇◆

館の応接間に通されたジーヴァは、椅子に腰かけながら交渉相手の来訪を待っていた。

静かに瞑目（めいもく）しているようにみえるが、横顔には僅かな緊張が伺（うかが）える。

しかしそれも無理からぬことだろう。彼からす

ればここは既に敵地の只中だ。話し合いのために派遣した使者が殺されることなどざらにある。今こうしている間にも、部屋の外に武装した兵士たちが集まっているかもしれないのだ。

（……だが、そうはならないはずだ）

始末する機会ならばここに来るまでにあった。そして自らがマーデンの要人であることと、王太子の仁君という評判を踏まえれば、話し合いに持ち込める可能性は低くない。

（もっとも、その話し合いが最大の問題なのだがな）

どちらかといえば、緊張の理由はそちらの方だ。時間を優先したため相手についてはほとんど調

べられていない。知っている情報は断片的なものばかり。これが吉と出るか凶と出るか。

そう思い悩んでいると、扉が開いて一人の少女が現れた。抜けるような白い髪と赤い瞳。フラム人だ。そういえばマーデンと違いナトラではフラム人は珍しくないと聞く。

「摂政殿下のおなりです」

少女に次いで、扉の向こうから護衛を伴って少年が現れた。

「――お初にお目にかかります、摂政殿下」

ジーヴァは少年に恭しく一礼した。

「私はマーデン王国外交官のジーヴァと申します」

「ナトラ王国摂政、ウェイン・サレマ・アルバレストだ」

若い、とジーヴァは思った。十代半ばの少年だとは聞いていたが、こうして目の当たりにするとやはりあどけなさがまだ残る。

しかし同時に、彼の立ち振る舞いには国を率いる人間としての自負と貫禄があった。血脈だけのお飾りではないとジーヴァは心に刻み込む。

「――まずは突然押しかける形になったこと、お詫びいたします、摂政殿下」

互いに机を挟んで向かい合ったところで、スタートは儀礼的な謝罪から。

背後に二二ムを控えさせるウェインの方もそつなく応じる。

「火急（かきゅう）を要する問題が我らの間に存在することは承知の上だ。その点についてはむしろ、よくぞ来てくれたと歓迎したい」

そこでウェインは肩をすくめた。

「しかし、何分（なにぶん）急なことだったのでな。客人を迎えられるのはこの部屋だけだった。可能ならもう少し格式のある席を用意したかったが、許されよ」

「ご配慮（はいりょ）、痛み入ります。しかし事前に連絡を出さなかったのはこちらの落ち度。たとえ招かれた先が野原であっても感謝しかありませぬ」

「そう言ってもらえればこちらの気も休まるというものだ」

ウェインが浮かべたのは友人に向けるようなくだけた微笑(ほほえ)み。彼の人柄がそのまま表れたかのようで、なるほど、彼はナトラの民にさぞ愛されていることだろうと思わせる。

だがジーヴァの心に緩みは生じない。自分はナトラではなくマーデンの民であり、何より本番はここからなのだ。

「してジーヴァ殿、ここには何用で来られたのかな？　貴殿も知っての通り、今この地はマーデンの民が呼吸をしやすい場所ではないが」

来た。本題。ジーヴァは一度強く歯を噛(か)みしめ、言った。

「それはもちろん――我が軍に代わってこの地の警護を請け負ってくださったあなた方への御礼と、引継ぎの準備についての話をしに参りました」

ジーヴァの言葉を受けて、「は？」という顔になったのは二ムや護衛の兵士だった。

あるいは臆面(おくめん)もなく鉱山を返せなどと言ってくれば、兵士は殺意を漲(みなぎ)らせていただろう。しかしジーヴァの言葉は彼らにとってあまりにも想定外だ。

実のところ、それはウェインも同じだった。た

だし彼が他と違うのは――

（なーるほど、随分思い切ったな）

ニニムや兵士たちが呆気（あっけ）に取られている中で、ウェインは一瞬にしてジーヴァの真意を見抜いたところである。

『ウェイン、これはどういうこと？』

ニニムは紙に走り書きした文字でウェインに問いかける。

『つまるところ、お互いの侵略行為を無かったことにしましょう、って提案だ』

素早くペンを走らせ返事を示す。

ニニムは数秒ほど眉根を寄せた後、はっとした

表情になった。彼女だけに見えるよう、ウェインはにっと笑った。

マーデンにとって金鉱山は一日も早く取り戻したい場所だ。しかし交渉を始めれば先のマーデンの侵略行為への言及は避けられず、賠償（ばいしょう）や捕虜（ほりょ）の返還、国境線をどこに引き直すかなどで長引くのは必然といえる。

（まさか、両国の間に戦争が起きていなかったことにすることで、そのあたりをすっ飛ばそうとはな。この丸いおっさん、見かけによらず大胆に斬（き）りこんでくる）

さらにこの一手は、マーデンの敗戦という事実

を打ち消し、プライドの高いフシュターレ王の顔を立てることにも繋がる。なかなかの妙手（みょうしゅ）だ、とウェインは思った。

「我が国がカバリヌなどの隣国に国境を脅かされている間、最重要拠点であるこの地の守護を担ってくださったことには感謝の言葉もありません。無論、相応の謝礼はさせて頂きます」

侵略行為に対する賠償と金鉱山の買い取りを、謝礼という形で収める。当然謝礼がいくらになるかは議論を重ねることになるが、それでも普通の戦後交渉よりも話の進みはスムーズだろう。

そしてこの提案は一見するとマーデン側の都合

を強く感じるが、ナトラにもメリットはある。

「いやしかし助かりました。この金鉱山は我が国の生命線。もしも他国に奪われていれば――総力を挙げて取り返し、不届きな敵国を容赦なく滅ぼしていたでしょう」

メリットというのがこれだ。

マーデンとの戦争の回避。実際のところこれは大きい。

ポルタ荒原では勝利を得られた。しかし次は？

次に勝ててもその次は？

国力レースになればナトラの不利は明白だ。そもそもレースになった時点で、国としては詰(つ)んでいる。たとえマーデンを凌(しの)げても別の国がここぞ

とばかりに襲いかかってくるだろう。もちろんその危険はマーデン側にもあるのだが――フシュターレ王の理性が、そのリスクを認識してくれるかどうか、ウェインとしては甚（はなは）だ疑問なのである。

（プライドの高いフシュターレだ。何度負けても絶対に取り返そうとしてくる……それどころか負けるほどにムキになるだろう。共倒れなんてまっぴらごめんだ）

ゆえに、戦争の事実を消し去るのは悪くない。敗戦の汚名がなくなれば、フシュターレも当面は大人しくしている公算は高いだろう。その間にマーデンからせしめた金銭で国力を高められる。

もちろんデメリットもある。かねてより懸念(けねん)だった国家としてのメンツの問題だ。

特に軍部は反発するだろう。戦争の事実を消すということは、彼らの功績も表向きは失われるということになる。マーデンから支払われる金銭で補塡(ほてん)しても、感情的にはしこりが残るだろう。

だがそのデメリットを踏まえてもなお、ジーヴァの提案を受ける理由がある。

（ここまでの流れで解った……間違いなくマーデン側は金鉱山の枯渇に気づいていない）

ウェインたちのみが知るこの事実。

このまま持ち続けても、いずれはハズレくじで

あることが露見し、軍の士気はガタ落ちになるだろう。かといって他国に売れば恨まれるのは必然だ。

しかし今、マーデンに売るのならば？

手を付ける間もない程速やかに返還されたのだ。発覚してもこちらには向かず、マーデン内部で責任の押し付け合いが発生することだろう。もし金を返せと言われても、知らぬ存ぜぬで通せばいい。売却することで下がる軍からの評価も、真実を知れば英断であったと再評価に繋がるはずだ。

（戦争を回避し、枯れた鉱山で大金をせしめるチャンスは恐らく今この時だけだな……）

『向こうの提案に乗るの？』

ニニムに文字で問いかけられ、ウェインは肯定する。

『ああ。ただしここですぐに食いつけば足元を見られる。ちょいと揺さぶりもかけなきゃな』

『あんまり欲張らない方がいいんじゃない？』

『大丈夫だって。あくまで不自然に思われない程度に留（とど）めるさ』

不安そうな顔になるニニムに、ウェインはにっと笑った。

（……手ごたえが読めんな）

戦争事実の消去という提案は、ジーヴァにとっ

て苦肉の策であった。

もう少し時間があれば、あるいはフシュターレ王の度量がもう少し広ければ、別の方法もあったろう。しかし短期間でフシュターレを満足させつつ実質的な講和に至る方法というのは、ジーヴァにはこれしか思いつかなかった。

先ほどから一方的に語る言葉に熱が宿るのも、自らの提案の難しさを理解し、取り繕おうとしているがゆえのものだ。

しかし果たしてそんな小細工が通用しているのだろうか。

対面に座る少年は、こちらをジッと見つめながが

ら黙するばかりだ。どんな言葉にも微動だにせず、ただジーヴァの目を真っ直ぐに捉えている。

（鉄の像を木づちで叩いているような気分だが……ここで引くわけには……）

引くわけにはいかない。その思いが、しかし揺らいでいる。理由は脳裏にチラつく道中の光景だ。ボロボロの衣服を纏う鉱山の人々。そんな彼らに対して炊き出しなどを行うナトラの兵士たち。

もしもナトラ兵がいなくなれば、彼らはどうなるだろう。戻ってくるマーデンの管理人は、果たして彼らを人として扱うだろうか。

（……私は何を考えている。金鉱山を取り戻す。

そのために全力を尽くす。これでいい、これでいいんだ）

自らに何度も言い聞かせていたその時、ウェインが動いた。

「――リビ」

言葉の意味を即座に理解できず、ジーヴァが戸惑う中でウェインは続ける。

「セフティ、レヒス、タルギア、カーラル……」

「せ、摂政殿下……その、何を？」

「名前だ」

ウェインの声には、底冷えするような迫力があった。

「ポルタ荒原で死んだ、我が軍の兵士たちの」

「――」

ジーヴァは己の心臓が跳ねるのを感じた。

類稀（たぐいまれ）なる仁君。目の前に座る少年がそう評される人物であることは知っていた。

知っていたのに。

「貴殿の主張は理解した。あるいは、そういう解釈も可能だろう。しかしジーヴァ殿、ならば死んだ彼らの魂はどこへ行けばいい？　祖国のために、誇り高く散っていった彼らの墓標（ぼひょう）になんと刻めば

「そ――れ、は」

「まさか、何もない荒原で死んだ間抜け共、ここに眠ると書け――とは言うまいな？」

凄(すご)みを感じさせる眼差(まなざ)しに、ジーヴァは二の句を継げなかった。

その姿を見て、ウェインは心の中で喝采(かっさい)をあげる。

（おっしゃ、効いてる効いてる！）

だが隣の二二ムは心なしか渋面(じゅうめん)だ。

『ちょっと効きすぎじゃない？　これで交渉不可と思われたら本末転倒でしょ？』

『いやあこれぐらい普通だって。むしろもうひと押し欲しいところさ』

幸いにも自分は表向きは仁君として通っている。

兵や民を引き合いに出すことに説得力はあるはずだ。そうして交渉の壁を高くするほど、向こうは金を積まなくてはならなくなる。

「ジーヴァ殿、ここの民がどのような扱いを受けていたか、貴殿は知っているか？」

「……はい」

「少し前にここの纏め役の一人が陳情してきた。どうか鉱山の民を見捨てないでほしい、と。マーデンではなく、ナトラの我々にだぞ。それだけでも彼らがどのように扱われてきたか解るというものだ。仮にここを君たちに引き渡したとして、彼らはどうなる？　ようやく掴(つか)めた希望を失い、残

るのは絶望だけだ」

「……」

「これらを踏まえた上で、もう一度問おう。――こに何用で来られたのだ、ジーヴァ殿」

――誇り高い人になりなさい。

かつて、母から贈られた言葉をジーヴァは思い出していた。

もはや色あせた記憶だが、きっかけはいじめられている一人の少年から目を逸(そ)らしたことだ。口をつぐみ、家に戻り、何事もないように振る舞って、けれど母にはお見通しで。

――誇り高い人になりなさい。未来の自分に、胸を張れるように。

その言葉は強く心に残り、ゆえに、そうなろうと思った。十年、二十年、三十年と歩き続けた先で、ふと振り向いた時に見えるものから目を背(そむ)けることのないような生き方をしようと思った。

思っていたはずなのに。

挫折。圧力。保身。派閥争い。

気づけば幼き日の思いは失われ、歩く道は日向(ひなた)から遠い場所に。

仕方のないことだ。理想は届かないからこそ理想なのだからと言い訳して。

なのにこの少年は、摂政という自分よりも遥(はる)かに困難な立場に身を置きながら、民を守ることに躊躇(ためら)いがなく。

「……摂政殿下」

「なんだ」

「お答えする前に、一つ、私からお尋ねすることをお許しいただきたい」

「許す」

ウェインの目に迷いはない。眩(まぶ)しいほどに真っ直ぐだ。

「……その背後の方は、殿下にとっての何者(なにもの)なのでしょうか」

美しく透き通る髪を持つ、フラム人の少女、あの時の少年もそうだった。彼もまたフラム人であり、それゆえに迫害されていた。

なぜ今になってあの日のことを思い出したのか。

その理由が、ようやく解った。

「ニニムは、俺の心臓(しんぞう)だ」

（私は、彼のようになりたかったのだ――）

（今の質問、何の意味があったんだろ）

特に迷うことなく返事をしたものの、ウェインはジーヴァの問いに内心で首を傾(かし)げていた。

様子を探ろうにもジーヴァは俯(うつむ)き、その顔色は

窺(うかが)えない。ここぞとばかりにウェインとニニムは文字でやり取りする。

『私が物珍しかったんじゃない？　西側じゃ外交の場にフラム人がいるなんてまずないでしょ』

『にしては、タイミングと様子が変な気もするんだよな』

『だったらそうね……民と兵を労(いた)わり、フラム人でさえも差別しないウェインに感動したとか』

『ははっ、実はこの外交官が人情家だってか？　無い無い』

『でも、もしそうだったら交渉諦(あきら)められちゃうかもしれないわよ？』

『大丈夫だって。そうなったら鼻でジャガイモ食ってやるよ』

そう気楽に応じていると、対面のジーヴァが静かに顔を上げた。

「――摂政殿下の御心、理解いたしました」

その表情はどこか晴れやかで、重荷から解放されたようにもみえる。

「戦死者の方々に対する無礼な発言、お許しください。私はとんだ思い違いをしていたようです」

「……ん？」

様子がおかしい。そんな気がしたウェインだがジーヴァはそのまま続ける。

「貴国が血を流して得たこの地をナトラの地とし、民を断固として庇護するつもりでおられる以上、我らとは弓矛を交えて決する他にないことは明白」

「え」

「恐らくこれを最後に私は外交の任から解かれるでしょう。ですが、貴国の断固たる姿勢は私が一分も漏らさずフシュターレ王へお伝えします」

「ちょ」

「それでは摂政殿下、私は急ぎ王宮へ戻らせて頂きます。――最後に私的なことを言わせてもらえれば、貴方のような徳の高い御方と言葉を交わせたことは、誠に光栄でした」

ジーヴァは深々と一礼し、部屋を辞した。

ウェインとニニムは彼の背中が扉の向こうに消えるのを見送り、そのまましばし硬直した後、互いに見合って視線を重ねた。

「ええっと……ニニム？」

「……とりあえず、ジャガイモを用意してまいります」

ニニムに言えたことは、それだけだった。

第四章　心臓

兄のウェインが軍を率いて西へ向かってからというもの、フラーニャの日課には、私室のテラスから西の空を見つめる時間が追加された。

その行為がなんら益体（やくたい）のないものであることは、フラーニャも解っている。兄がまだ帰って来ないことは、兄からこまめに届く手紙が教えてくれることだ。どんなに目を凝（こ）らそうとも、兄の姿を捉（とら）えることは適（かな）わない。

とはいえ理屈で解っていても自制できれば苦労

はしない。思えば兄が帝国に留学してる時も同じことをしていた。あの頃(ころ)は、見つめていたのは東側の空だったが。

誰(だれ)も口を挟まなければ、フラーニャは延々と空を見つめ続けるだろう。そして国王が病(やまい)に臥(ふ)せ、王子がいないナトラの王宮において、王女たるフラーニャの行いを諫(いさ)めることができる者は僅(わず)かだ。

「姫様、そろそろ部屋へお戻りなさいな。あまり風に当たるのは体によくありませんよ」

その内の一人、侍従(じじゅう)のホリィに部屋の中から呼びかけられて、フラーニャは振り向いた。

ホリィは恰幅(かっぷく)の良い年配の女性だ。肌は浅黒く、

髪は短い。多民族国家であるナトラでもあまり見ない人種だ。出身は大陸の南方だそうだが、詳しくはフラーニャも知らない。物心ついた時には彼女が傍(そば)で世話をしてくれていた。

「もう少しだけ。お兄様の無事をお祈りしなくちゃ」

「寒いテラスでしようが暖かい部屋でしようが、祈りに違いはありませんよ」

「そんなことないわよ。神様だって辛(つら)い思いをしてる人のお祈りの方に耳を傾けると思うわ」

「でしたら返事は、まずは自分を労(いた)わりなさい、でしょうね。それにほらほら姫様、うかうかしてると焼き立てのパンケーキが私の胃袋に入っちゃいま

すよ」

「まあ。食べ物で釣ろうだなんて、ホリィってばずるいわ」

「せっかくの焼きたてを逃すなんて罪深いことをしてはならないと、私の神様が仰(おっしゃ)るもので」

そう笑いながらテーブルの準備をするホリィの姿と、僅かに届くパンケーキの香りを前にして、フラーニャはついにテラスから私室へと足を運んだ。

「ナナキ」

部屋に戻るやいなや、フラーニャは壁際に向かって声をかけた。

するとまるで壁からにじみ出てきたかのように、

一人の少年の姿が露わになる。

名はナナキ。彼女の護衛であり、その透き通るような白髪と赤い瞳が示す通り、ニニムと同じフラム人である。

「一緒に食べましょう」

「……」

ナナキはこっくりと頷くと、フラーニャと共に席についた。その様子を微笑ましそうに見守りながら、ホリィはパンケーキを切り分けていく。

「それにしてもお兄様、お手紙では元気そうだけど、本当に大丈夫かしら」

「そうそう弱音を吐くような方ではありませんか

らねぇ」

フラーニャと同じように、ウェインのこともホリィは長らく見てきた。彼の性格については時期によって差があるが、どの時期であっても自分の弱い部分は表に出さない子だったと思う。

「問題ない」

その時、黙々とパンケーキを口に運んでいたナキが小さく呟いた。

「王太子には、ニニムがついてる」

ニニム・ラーレイ。ウェインの腹心であり、フラーニャにとっても姉のような人物。

「……そうね、お兄様とニニムが一緒ですものね」

フラーニャはウェインと同じくらい、彼女のことも信頼している。二人が一緒ならば、できないことなど何もないのだろうと思えるほどに。

「そうだわ。お兄様とニニムがいるのなら、私も遠征に参加したって問題は」

「ダメだ」

「ダメです」

即座に二人にダメだしされ、ふにゃあ、とフラーニャは机に突っ伏した。

「いくらなんでも危険ですし、今の姫様にはそれほど時間の余裕はありませんよ。政治の勉強をしたいと、ご自分で言いだしたことでしょう？」

「それはそうなのだけれどぉ」

これまでは蝶(ちょう)よ花よと育てられてきたフラーニャだが、最近は兄を手助けするために、勉学に励んでいる。しかし勉強というのは往々にして、身につく速度よりも億劫(おっくう)になる速度の方が上回るのが常であり、今では講義の時間が来るたびに思わず呻(うめ)き声が出てしまう。

「はあ……きっとお兄様は、私なんかじゃ想像もつかないような難題でも、軽々とこなしてしまうのでしょうね」

遥(はる)か西で今も獅子(しし)奮迅(ふんじん)の働きをしているであろう兄を想(おも)い、フラーニャは小さく息を吐いた。

◆◇◆

一方、当のウェインがどうしているのかといえば、

「やっ――――――べええええええ！」

妹の想いとは裏腹に、部屋で身もだえしていた。

「やっちまった、完全無欠にやっちまった……！

まさかあの程度で手を引くだなんてマジかよ

……マジだよ……ぬおおおおお！」

「欲をかいたのが裏目に出たわね」

応じるニニムはウェインと違い平静だが、表情は硬い。

「しかもさぁ！　めっちゃ噂（うわさ）になってるじゃん！　会議の内容！」

「護衛に口止めしなかったものね……」

外交の失敗に気を取られている内に、会議を見聞きしていた護衛たちからその内容は鉱山にいる軍や住人に流布（るふ）された。

しかも、そもそも会議の内容からして「金の力で強引（ごういん）に解決しようとしたマーデンの提案を、民や兵を思いやる王太子殿下（でんか）は断固として拒絶した」というものだ。

元よりウェインに心酔している護衛たちを通してこれが語られたとなれば、それはもうマーデン

がいかに悪逆卑劣な蛮族であり、ウェインがいかに天理に通じた心優しい賢人であるかという内容になるのは必然だった。

その結果、

「マーデンめ。国を守るべく散った兵の死を侮辱するなど、道理を弁えぬ畜生か！」

「外面は金で誤魔化せても、心の卑しさは隠せぬようだな」

「おお、しかしさすがは王太子殿下。何でも国家予算に匹敵する金を積まれても、頑として首を縦には振らなかったとか」

「あの方こそまさしく我らが誇り。王太子殿下の

決断に泥を塗るような真似はできんな！」

というような具合で、軍の士気は最高潮。鉱山の住民も感動の涙を流し、どうか自分を王太子殿下の役に立ててほしいとこぞって名乗りを上げるほどである。

「もう今更撤退とかできる空気じゃないじゃん……俺はただ金鉱山を売り払って大金をせしめたいだけなのに、どうしてこうなった……」

ぐえー、と机に突っ伏すウェイン。

そんな彼を慰めるようにニニムは言った。

「……でも、私は良かったと思うわよ。今回の件を断って」

「はぁーん!?　どの辺が良かったんですかねニニムさぁーん!?　不良債権を金を貰(もら)った上で押し付ける絶好の機会を逃(のが)したんですけどぉー!?」

「でもその代わり、向こうの要求を呑(の)んで軍部のプライドを傷つけることになったわ。それは長い目で見れば、ウェインの統治にとって疵(きず)に」

「いや、そもそも俺そんな長く統治しないし即位したら帝国にとっとと身売りして――うおおおおいい!?　やめろ、俺の鼻にジャガイモを突っ込もうとするな……！」

ウェインはどうにかニニムの蛮行を阻止すると、奪い取ったジャガイモを手の中で転がしながら言

った。

「何にしても、この鉱山から手を引くのは確定事項だ。ただ問題は最高のチャンスを逃した今、どのタイミングでそれを行うかになる」

「軍が徹底抗戦一色の今、成果もなしに撤退はありえないわね」

「マーデンは大軍を率いてくるはずだ。その戦力差を目の当たりにすれば、否応にも厭戦感情は強くなる」

「今の士気の高さと強さは相当よ。逆に奮起しちゃうんじゃない？」

「一戦やむなしとは思ってる」

不満そうにウェインは呟いた。

「血が流れれば自然と士気は落ちる。それに交渉が失敗に終わった今でもマーデンは早期解決を望んでるはずだ。膠着(こうちゃく)状態に持ち込めれば、講和を結んで金鉱山を買い取らせることもできるかもしれん……！」

「まだ諦(あきら)めてないの？」

「諦めきれるかっつーの！　ただでさえ遠征費用が嵩(かさ)んでるんだから、金をもぎ取れそうなら全力でもぎとるわ！」

「はいはい、解ったわよ。それじゃあマーデンの動向に目を光らせつつ、籠城(ろうじょう)戦を想定して準備を

急がせるってことでいいわね？」

「それでいい」

ウェインは頷きさらに続けた。

「あとマーデンの王宮に内通者は入ってるよな？」

「ええ、生粋派（マーディア）と外来派（ステラ）に少人数ずつだけど」

「外来派（ステラ）の後押しと、鉱山の早期奪還を煽（あお）らせておいてくれ。不自然でない程度でいい」

「手配するわ」

「それとラークルムとペリントに陣地について話がある」

「了解、ついでに呼んどく」

ニニムは踵（きびす）を返して執務室を出ていく。

一人になったウェインは、しばらくジャガイモで手遊(てすさ)びした後、天井(てんじょう)を仰(あお)いだ。

「次の戦争、ハガルに任せっぱなしにはできそうにないな……俺も動くか」

◆◇◆

ラークルムの元に二ムが現れたのは、坑道の入り口に設営された拠点で、ペリントと坑道の場所と状態について話し合っているところだった。

「ラークルム隊長、殿下がお呼びです。ペリントさんも一緒に来るようにと」

「承り(うけたまわ)ました。すぐ参ります」

兵の指揮や住民との交渉など、ラークルムが抱える雑務は大きい。しかしウェインから呼び出されたとなれば話は別だ。ラークルムはペリントを伴い(ともな)館へと向かう。

「ラークルム殿、一つよろしいか」

「何なりと」

最近のラークルムは業務内容的に、鉱山の顔役の一人であるペリントと過ごすことが多く、それなりに話せる間柄になっている。

だからこそペリントがその質問を口にしたのは、当然の流れと言えるだろう。

だが、

「あのフラム人の少女は、摂政殿下の愛妾(あいしょう)か何かなのか……？」

「……」

その瞬間、ラークルムは動きを止め、纏(まと)う空気が張りつめた。

ペリントは自分が間違いなく失言をしたと理解し、ラークルムの手が腰元の剣の柄に添えられたのを見て、死を覚悟した。

「……ペリント殿、そういえば貴殿(きでん)はマーデン人だったな」

「……その通りだ」

ペリントはゆっくり頷いた。即死は免(まぬか)れたが、まだ死がすぐ傍に揺蕩(たゆた)っているのを肌で感じた。

「ならば、不思議に思うのも無理はない。フラム人は西側ではよい扱いをされていないからな」

「……」

「ニニム殿は、王太子殿下にとってかけがえのない人物だ。愛妾という側面も確かにあるだろうが、それ以上に重要な補佐であり、また無二(むに)の友人でもある」

「それは……なるほど、どうやら失礼なことを口にしてしまったようだ」

「いや、謝る必要はない。むしろ気づかせてもら

えて助かった。ここは王宮と違い、ニニム殿を知らない者が多くいるのだな」

ラークルムはしばし言葉を探るように瞼を閉じ、言った。

「ペリント殿、我らが王太子殿下は心優しく、誠に仕え甲斐のある御方だ。だが全ての王がそうであるように、触れてならない逆鱗を殿下も持っている」

「……」

「私が知る限り、これまで三人、公然とニニム殿を侮辱した者がいる」

「……その者たちは？」

「もういない」

言葉の意味するところをペリントは速やかに理解した。

「ペリント殿、私は貴殿に命令する権限を持たない。ゆえにこれは嘆願（たんがん）になるが、貴殿にも貴殿の配下にも口には気を付けるよう徹底してもらいたい」

「……承ろう。だがもしも、誰かが口を滑らせたら」

「その時は」

ラークルムは剣の柄を叩（たた）いた。

「速やかに無かったことにするのがいいだろう。怒った竜の息吹（いぶき）に焼かれるのが、その者だけでむとは限らないからな」

「……」

ペリントは黙り込み、二人は沈黙を引き連れてウェインが待つ館の執務室に到着した。

「殿下、ラークルムとペリントです」

「入れ」

ラークルムはペリントを伴って部屋に入る。ペリントの横顔が若干緊張してみえるのは、先の会話が少なからず影響しているのだろう。椅子に座るウェインの姿を認めると、彼らは揃って膝を突いた。

「お呼びにより参上いたしました」

「私にも用向きがあるとのこと。何なりとご命じ

ください」

二人の口上を受け取り、ウェインは頷き言った。

「先日のマーデンとの交渉決裂については耳にしたか？」

「はっ。聞き及んでおります」

「ならば話は早い。マーデンと一戦交えることはもはや避けられないだろう。これから軍議を重ねて詳細を詰めることになるが、恐らくは鉱山に立て籠もって対抗することになるはずだ。そこで、先んじてお前たち二人に進めておいてほしいことがある」

ウェインはにっと笑い、その計画を口にした。

◆◇◆

ナトラ軍が着々と防衛準備を整える一方で、マーデン側も鉱山奪取に向けて動き出していた。

「兵の方は今どれほど揃っている？」

宮廷にて準備の陣頭指揮を執るのは大臣のホロヌィエである。

「現在二万ほどになります」

「予定より少ないではないか。どうなっている」

「それが、生粋派（マーディア）のモナス家を筆頭に未（いま）だに出兵を渋る者たちが」

「この期に及んで無様なことだ。これ以上駄々をこねるならば王命により斬首すると伝えろ」
「ははっ！」
部下たちに指示を飛ばし、次に彼が向かうのは王の待つ広間だ。
現れたホロヌィエに、フシュターレ王は苛立ちを隠そうともせずに言った。
「ホロヌィエよ、まだナトラの羽虫共を滅ぼせんのか」
「王よ、もうしばらくのご辛抱を。必ずや勝利を捧げますゆえ……」
「そんなことは当たり前だ！　いいか、奴らは無

礼にも話し合いでの解決を断りおった！　羽虫の分際で、私の顔に二度も泥を塗ったのだ！　これが許せるものか！」

フシュターレ王はそもそも外交での解決に乗り気ではなかったが、かといって断られるとはまるで考えていなかったようだ。ナトラ王国を圧倒的に格下であると考えている王にとって、話し合いを提案すれば、ナトラ側が卑屈（ひくつ）に媚（こ）びてくる以外に想像もつかなかったようである。

ホロヌィエとしては笑いが止まらない。おかげで外交による解決を主張していた政敵のミダン大臣は王から遠ざけられ、半ば失脚（しっきゃく）した形だ。さら

に奪還作戦の采配（さいはい）は外来（ステラ）派の自分の手に任され、もはや邪魔する者はいない。

ここで金鉱山の奪取に成功すれば、王宮での地位は盤石（ばんじゃく）だ。目障（めざわ）りな生粋（マーディア）派を駆逐し、ろくに政治を知らない王に代わって一国を牛耳（ぎゅうじ）れるだろう。

（だが、このような小国で満足する私ではない……もっと大きなものを手にしてみせよう）

膨れ上がる野心と、それを成就する道筋がハッキリと見えることに、ホロヌィエは歓喜する。

そんな時、ホロヌィエにとって重要な人物の声が届いた。

「王よ、此方（こちら）におられましたか」

現れたのは具足(ぐそく)を纏(まと)う一人の美丈夫(びじょうふ)だ。彼こそ外来派(ステラ)に属し、その全面的なバックアップを受けて若くして将軍の位についた男、ドラーウッドである。

「到着が遅れましたこと、お詫(わ)びいたします。ドラーウッド、お召しにより参上いたしました」

「ふん、ようやくか……」

臣下の礼を取るドラーウッドを見て、フシュターレは仏頂面(ぶっちょうづら)で鼻を鳴らした。フシュターレはドラーウッドを嫌っており、その理由が自分とは比べ物にならない端正(たんせい)な顔立ちに嫉妬(しっと)しているからであることは、家臣たちの間では周知の事実だ。

それでもこの期（ご）に及べば、いくらフシュターレといえど顔を理由に遠ざけることはしないが。

もっとも、ドラーウッドが若く顔が良いのは偶然ではない。顔立ちが整っていれば自（おの）ずと民衆の人気も取りやすく、若ければ経験不足から操縦も取りやすい。能力よりも政治的な面を重視した上で外来派（ステラ）によって押し上げられたのがドラーウッドなのである。

「よくぞ戻られました、ドラーウッド将軍。西方の守りではさぞご苦労なさったでしょう」

「なんの、大きな衝突もなく落ち着いたものでした」

それはそうだろう。マーデンの西方は安定して

おり、将軍として守りを務めたという看板を得るためだけの場所だ。どんな無能でも失敗はしない。

「真に苦労を強いられているのは、今もナトラへの警戒を続けている兵士たちでしょう」

外来派（ステラ）と繋（つな）がっているドラーウッドは、当然東側で起きたナトラとの戦争についても承知している。

「そのナトラから我が国の領土を奪い返すために、貴殿に指揮を執って頂く。承知していただけますな？」

「もちろんです」

ドラーウッドは力強い笑みを浮かべた。

「ナトラといえば、レベティア教の教えを解さぬ

下賤（げせん）な蛮族の集まり。そのような連中に愛する国を切り裂かれたと聞き、忸怩（じくじ）たる思いを抱えていました。我が王と神の名において、奴（やつ）らに身の程を教えて差し上げましょう」

かくして、マーデンは金鉱山奪還のために軍容を整える。

集められた兵士はのべ三万。総指揮を執るのはマーデンの外来派（ステラ）における武の象徴であるドラーウッド。

大陸の季節が夏を迎える頃（ころ）、ナトラとマーデンの両軍はぶつかることになる。

◆
◇
◆

ジラート金鉱山は、主要な採掘場となっている鉱山から、くるりと弧を描く尾根（おね）が伸びているのが特徴だ。上空から俯瞰（ふかん）すれば、さながら巻かれた獣の尻尾のように見えるだろう。

鉱山の頂点付近は比較的傾斜がなだらかだ。とはいえあるのは岩と砂ばかりで、採掘も鉱山中腹の坑道から行われている。踏み入る者はほとんどいない。――これまでは。

今、鉱山の頂点にはナトラ王国軍の本陣が設営されていた。

「いやしかし、壮観だな」
本営の端から山麓（さんろく）を見下ろしながらウェインは呟いた。
彼の目に映るのは、鉱山を取り囲むように布陣したマーデンの軍勢だ。その数、実に三万。
「五千対三万。普通に考えたら絶望的ね」
隣に立つニニムが息を吐く。五千というのは、この鉱山に籠（こ）もっているナトラ側の兵力である。
もちろん籠もるに当たって物資を鉱山内部に蓄えるなど、準備は入念にしてあるが――それでも絶望的な兵力差だ。
だというのに、ウェインにもニニムにも悲壮な

様子は一切（いっさい）無い。

「鉱山の表に二万五千、裏手に五千ってところか」

「鉱山の裏は切り立ってとても登れないものね。それにしたって、裏の布陣は手抜きすぎに見えたけど」

「ま、そりゃそうだろう」

ウェインはお見通しとばかりに言った。

「俺らを皆殺しにすることが相手の目的じゃないしな。むしろ裏から逃げられるなら逃げてくれって思ってるさ」

そしてそれこそが、圧倒的な戦力を持つ敵軍の付け入る隙（すき）であることを、ウェインはしっかりと

理解していた。

「ニニム、皆は？」

「集まってるわ」

「オーライ、それじゃ開戦前に最後の打ち合わせをするか」

そう言って、ウェインとニニムは設置された天幕の一つに向かった。

「ドラーウッド将軍、布陣の方が整いました」

「ご苦労」

ウェインたちナトラ軍が山から下界を見下ろす一方、鉱山を見上げているのがマーデン軍だ。

マーデンの財に物を言わせてかき集めた兵数は実に三万。マーデンの歴史上でも屈指の大軍を預かるのは、さしものドラーウッドといえど初めてのことだったが、彼の端正な横顔に緊張や不安といった感情は浮かんでいない。

むしろ今の彼が抱く感情は、哀れみに近いものだ。

「この大軍を前にして、逃げださずに籠城とは……愚(おろ)かなことだ」

「そこは勇気があると褒(ほ)めるところでは？」

副官が揶揄(やゆ)するように応(こた)えるが、ドラーウッドは痛ましげに頭を振る。

「こんなもの、蛮勇とすら言えんよ。戦力差とい

う人間ならば誰もが持っている物差しを手にしていないだけだ。まったく、獣のごとき無知蒙昧（むちもうまい）ならば、せめて獣らしく引き際程度は心得ていればよいものを。そうすれば、流れる血も減るというのに」

「さすが将軍、敵に同情してやるとはお優しいことで」

「人と人の戦ではなく、三万の軍勢で獣を狩り立てるだけの作業でしかないとなれば、こうもなるさ」

ドラーウッドは鉱山の天辺に目をやった。

「苦しまぬよう速やかに仕留めてやろう。それがせめてもの慈悲（じひ）だ」

「――予定通りだ」

ウェインは軍議の席につくと、真っ先にそう口にした。

天幕の中にいるのはナトラ軍の指揮官たちだ。当然、ラークルムやハガルの姿もある。

彼らの間に動揺はない。ウェインの言葉が虚勢ではないことを、この場にいる全員が知っていた。

「向こうの王宮で煽らせた甲斐があった。敵は間違いなく短期決戦を狙ってくる」

「大軍で威圧し、我らが逃げるのならばそれでよし。逃げなければ、兵力差で一気に奪還する、という

ことですな」

「ああ。これなら勝ち目は十分にある」

ウェインたちナトラ軍にとって最悪なのは、絞った兵力での耐久戦を仕掛けられることだ。

大軍を用意するのではなく、数千程度の兵で鉱山を警戒させ、その間、鉱山を起点としたナトラ軍の補給や交易をひたすら妨害する。

未(いま)だに鉱山周辺にはマーデンの支配域が多く、鉱山は半ば孤立(こりつ)している形だ。鉱山を守るための兵力を維持し続けるのも楽ではない。真綿で首を締めるように追い詰められれば、先に音(ね)を上げるのはナトラ側だろう。

しかしマーデンはそれをしなかった。金鉱山という金脈にして命脈を敵国に握られているという不安が、その選択肢を取らせなかったのだ。

「三万の兵は相当無理して引っ張り出したのは間違いない。維持のために消費される資金は元より、国境の防衛もかなり手薄になってるはずだ。となると、あの三万を保っていられる時間は、そう長くない。恐らくは――二カ月が限度」

密偵などからもたらされた情報を統合しての結論だ。精度は高い。

そしてマーデン軍を撤退させられれば、ナトラ軍は相手を撤退させたことで自尊

心が満たされ、マーデン側は武力で取り返すのが難しいと認識を改めるだろう。

（その時こそ、二度目の講和のチャンス……！）

今度こそ逃すまい。

決意を胸に、ウェインは言った。

「行くぞお前たち。――泥沼の一カ月の始まりだ」

サイン本が当たる!!
レビュー・キャンペーン
実施中

Twitterでハッシュタグ「#売国」を付けて、試読版の感想をツイートしてください。
抽選で10名の方に、著者・鳥羽徹先生、イラスト・ファルまろ先生のお二人のサインが入った本をプレゼントいたします。

対象はハッシュタグ「#売国王子」がついたツイートのみとなりますのでご注意ください。

応募期間は2018年5月31日までとなります。

『天才王子の赤字国家再生術～そうだ、売国しよう～』
試読版・完

「天才王子の赤字国家再生術
～そうだ、売国しよう～」
2018年5月15日頃発売予定！！
どうぞよろしくお願いします！！